

1. 自然遺物の出土状況

(1) 各区の貝分布状態

発掘区は昭和 54 (1979) 年度試掘時の区画を踏襲し、県道と平行に一辺 4 m の方眼とした。貝層を採り上げる基準としては 4 m 区画内をさらに次のように 400 箇所に分した。まず大区画同様に北から南に向かって 20 cm 毎に 1 ~ 20、西から a ~ t の記号を付け、例えばある 20 cm 方眼を 5B 区 3e と表示する。貝層は海拔 8.5 m を基準にして 20 cm 四角の小区画を深さ 5 cm 毎に土と共に採集した。しかし、調査後 30 年を経たのでそれぞれの袋に添付した紙片が消えたり、破れたものもあるため上から下まで良く残っている以下の区画について対象にする。

5D 区 : 1a/3a/5a/4b/5b/3c/4c/5c/4d/4d/1e/3e/5e

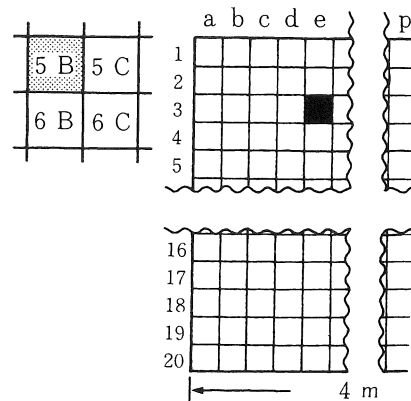
7B 区 : 7e/9e/8f/17a/19a/17c/19e/18d/19c/3g/14-15g/17g/13h/11i/12-13i/14i/11j/13j/11k/13k/15k/7m/9m
/11m/11n/7o/8o/9o/11o/17o/19o/20p/3q/5q/7q/9q/11q/13q/14q/15q/17q/19q/4r/10r/11r/12r/13r/15
r/17r/18r/1s/3s/5s/7s/9s/11s/12s/13s/15s/16s/17s/19s/20s/1t/4t/6t/9t/10t/11t/18t/19t

7C 区 : 1a/3a/5a/7a/10a/11a/13a/15a/16a/17a/18a/19a/7b/1c/3c/5c/7c/9c/11c/15c/16c/6d/7d/16d/3e/5e/7
e/9e/11e/13e/11f/5g/6g/7g/9
g/11g/13g/19g/5i/7i/8i/11i/13i/15i/17i/19i/7n/1o

8B 区 : 1g/3g/1o/1r/1s/2s/8s/2t

8C 区 : 1a/1c/3c/5c/7c/9c/17c/19c/19d/1e/3e/5e/7e/9e/15e/19e/20e/6f/
7f/20f/1g/5g/7g/9g/15g/16g/17g/19g/7h/8h/17h/5i/7i/9i/11i/15i/17i/
19i/3j/6j/15j/11/5l/7l/9l/19l1c/1e/1g/3g/1o/1r/1s/2s/8s/2t

9C 区 : 1c/1e/1f/1g/2e/3e/3c/5c/7d/5e/7e/9e/11e/2g/5g/7g/9g/11g/1i/
3i/4i/5i/7i/9i/10i/11i



第 168 図貝採上げ模式図

見出し状況一覧

	1a		3a		5a		4b		5b		3c		4c		5c		4d		1e		3e		5e	
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
5D																								
98-100					Y11	Y15																		
100-105					Y39/Ma 4	Y56/Ma 6																		
105-110					Y45	H1/Y54																		
110-115					Y38/Ma 5	Y55/Ma 23																		
115-120					Y40	Y65/Ma 2/Mg11																		1Y
120-125					Y47/Ma 2	Y60/Ma 3																		
125-130					H2/Y80 /Ma17	H1/Y75 /Ma11																		
130-135					H2/Y28/ Ma2	Y32/Ma 9/Mg1																		
135-140					H1/Y13/ Ma2	H1/Y23 /Ma2																		
140-145																								

1c/1eは7B区に表記。

8B	1g		3g		1o		1r		1s		2s		8s		2t		
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	
65-70	なし																
70-75	T1	Y1															
75-80	H4/Y17/K1/He1/T 1	Y23															
80-85			Y8														
85-90			H8/13	H4/Y12													

貝の時期別分布について（表のまとめ）

出土した貝殻について、放射性炭素による年代測定 8 点を（株）パレオ・ラボに依頼し以下の結果を得た。測定結果・貝殻の出土場所とその深度は以下の通りである。なお、深度は標高 8.5m を基準としている。

表 1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-15032	調査区:7B区s15:深度65～70cm(810327)	試料の種類:貝(汽水産)(ヤマトシジミ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N
PLD-15033	調査区:7B区s15:深度75～80cm(810411)	試料の種類:貝(汽水産)(ヤマトシジミ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N
PLD-15034	調査区:7B区s15:深度85～90cm(810403)	試料の種類:貝(海水産)(ハマグリ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N
PLD-15035	調査区:7B区s15:深度95～100cm(810514)	試料の種類:貝(海水産)(ハマグリ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N
PLD-15036	調査区:7C区d16:深度65～70cm	試料の種類:貝(海水産)(マガキ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N
PLD-15037	調査区:7C区a15:深度75～80cm(810605)	試料の種類:貝(海水産)(ハマグリ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N
PLD-15038	調査区:5D区e5:深度115～120cm(810314)	試料の種類:貝(汽水産)(ヤマトシジミ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N
PLD-15039	調査区:5D区e5:深度115～120cm(810314)	試料の種類:貝(汽水産)(ヤマトシジミ) 状態:dry	超音波洗浄酸エッチング:0.2N

表 2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-15032	-7.65 ± 0.12	5067 ± 22	5065 ± 20	Marine09: 3517BC (58.1%) 3436BC34 21BC (10.1%) 3400BC	Marine09: 3562BC (95.4%) 3366BC
				Intcal09: 3943BC (22.2%) 3911BC38 78BC (19.5%) 3854BC3847 BC (10.3%) 3832BC3825BC (16.2%) 3804BC	Intcal09: 3952BC (35.7%) 3891BC38 85BC (59.7%) 3797BC
PLD-15033	-7.35 ± 0.12	5041 ± 22	5040 ± 20	Marine09: 3486BC (61.3%) 3401BC 3394BC (6.9%) 3384BC	Marine09: 3509BC (95.4%) 3360BC
				Intcal09: 3937BC (53.6%) 3871BC38 11BC (14.6%) 3791BC	Intcal09: 3946BC (95.4%) 3776BC
PLD-15034	1.13 ± 0.15	5013 ± 24	5015 ± 25	Marine09: 3457BC (68.2%) 3364BC	Marine09: 3492BC (95.4%) 3346BC
PLD-15035	-0.12 ± 0.15	5076 ± 22	5075 ± 20	Marine09: 3530BC (61.1%) 3437BC 3420BC (7.1%) 3400BC	Marine09: 3581BC (95.4%) 3372BC
PLD-15036	-1.78 ± 0.22	4851 ± 25	4850 ± 25	Marine09: 3295BC (64.4%) 3164BC 3144BC (3.8%) 3135BC	Marine09: 3317BC (95.4%) 3093BC
PLD-15037	-1.19 ± 0.11	4996 ± 23	4995 ± 25	Marine09: 3442BC (68.2%) 3350BC	Marine09: 3483BC (95.4%) 3336BC

PLD-15038	-10.12 ± 0.16	5798 ± 24	5800 ± 25	Marine09: 4311BC(68.2%)4248BC	Marine09: 4331BC(95.4%)4220BC
				Intcal09: 4704BC(44.5%)4651BC 4642BC(23.7%)4616BC	Intcal09: 4718BC(92.8%)4582BC 4568BC(2.6%)4555BC
PLD-15039	-8.70 ± 0.13	5832 ± 24	5830 ± 25	Marine09: 4331BC(68.2%)4269BC	Marine09: 4355BC(95.4%)4236BC
				Intcal09: 4764BC(2.6%)4758BC 4727BC(57.8%)4682BC 4635BC(7.8%)4620BC	Intcal09: 4781BC(83.3%)4650BC 4644BC(12.1%)4613BC

各資料について説明する。表中、暦年較正年代とは測定された年代を、年輪により年代の分かっている樹木について定された炭素年代で補正したもの。測定値だけでは実態とずれた値がでるために修正しているわけである。

資料 1 : 7C 区 a15 では標高 7.75m ~ 7.70 m で出土したハマグリを測定した (PLD-15037)。暦年較正年代は 4996 ± 23 年前である。これと同時に採り上げた 5 cm 厚さ内の貝殻構成は、ハマグリ 22・ヤマトシジミ 38・ウミナナ 3・オキシジミ 3・マガキ 4 である。

資料 2 : 7C 区 16d では標高 7.85 m ~ 7.80 m で出土したマガキを測定した (PLD-15036)。暦年較正年代は 4851 ± 25 年前である。これと同時に採り上げた 5 cm 厚さ内の貝殻構成はハマグリ 9・ヤマトシジミ 19・マガキ 13・シオフキ 1 であった。

資料 3 : 7B 区 15s では上から下に相互に 5 cm の空白を置いて出土した 4 点を測定した。PLD-15032 は標高 7.85m ~ 7.80 m までに出土したヤマトシジミである。暦年較正年代は 5067 ± 22 年前である。ここではハマグリ 7・ヤマトシジミ 21 の構成である。

資料 4 : 7B 区 15s の PLD-15033 は標高 7.75m ~ 7.70m で出土したヤマトシジミである。暦年較正年代は 5041 ± 22 年前である。

資料 5 : 7B 区 15s の PLD-15034 は標高 7.65m ~ 7.60m で出土したハマグリである。暦年較正年代は 5013 ± 24 年前である。ここではハマグリ 4・ヤマトシジミ 18・He1・マガキ 3 の構成である。

資料 6 : 7B 区 15s の PLD-15035 は標高 7.55m ~ 7.50m で出土したハマグリである。暦年較正年代は 5076 ± 22 年前である。ここではヤマトシジミ 2 のみの構成である。

資料 7 : 5D 区 e5 では 2 点を測定した。標高 7.35m ~ 7.30 m までに出土したヤマトシジミである。この部分の構成はヤマトシジミ 2 点のみであるが、下位には厚さ 2 cm の貝層が存在する場所である。まず PLD-15038 の暦年較正年代は 5798 ± 24 年前である。

資料 8 : 5D 区 e5 のもう 1 点ヤマトシジミ、PLD-15039 で暦年較正年代は 5832 ± 24 年前である。

2. 獣骨類の同定

横尾貝塚の動物遺体

西本豊弘（国立歴史民俗博物館教授）

横尾貝塚の1982年度の発掘調査では大量の動物遺体が出土した。そのうち、5・6・7・8区出土の動物遺体の内容を報告する。これらの地区は縄文時代前期と中期の包含層が主に分布するがその時期区分は行っていない。また貝類については発掘された高橋信武氏が分類されて別項目で報告されているので、ここでは哺乳類を中心に説明する。

今回分類した資料は約2800点であり、そのうち部位を同定した資料は約300点である。骨質の保存状況はよいが小さく壊れているものが多いので、四肢骨で部位と種を同定できる資料が少なかった。一方、顎骨が壊れており遊離歯が多かった。これらの破片以外に人骨の破片が多いことから、貝層が形成された後に縄文人の埋葬などで縄文時代に貝層が攪乱された頻度が高く、そのため獣骨が小さく割れたのではないかと推測される。動物骨の出土内容は表に示した通りであり、それらについて簡単に説明する。なお、本報告をまとめるにあたり、西本研究室の金ホンソク・住田雅和・浪形早季子の協力を得たことに感謝します。

1. 魚類・鳥類

魚骨で部位と種名が判明したものを表に示した。アオザメタイプの歯が1点と大型のサメ類の椎骨Ⅲ点がみられた。タイ類は最も多く出土しており、よく成育したクロダイが主体である。その他にマダイ・ヘダイも見られた。ボラ類の椎骨と大型のフグの歯板も出土している。これらの資料は発掘時に出土地点を記録されて採集されたものであり、その他に貝層とともに小さな魚骨片も多く採集されている。それらは小さく割れた破片であり、今回は分類を行っていない。それらの中にはイワシ類の椎骨も含まれていた。鳥類は、オオハムと思われる中型のアビ類の中手骨が1点と種不明の四肢骨破片が数点見られただけである。

表1 魚類・鳥類出土量

種名	部位	左右	発掘区			
			7 B	7 C	8 B	8 C
アオザメ類	歯				1	
サメ	椎骨					
クロダイ	前上顎骨	右			1	3
		左				1
	上顎骨	右				1
		左		1	1	1
	歯骨	右	1			
		左	1			
タイ	関節骨	右				1
	主鰓蓋骨	右				1
	棘					1
マダイ	歯骨	左				1
ヘダイ	前上顎骨					1
ボラ	椎骨		1			
フグ	歯板					3
アビ	中手骨右		1			
鳥	骨片		1			

2. 哺乳類

哺乳類はシカとイノシシが主体であり、その他にニホンザル・タヌキ・アナグマ・ノウサギ・イルカ類・クジラ類がごく少量見られただけである。シカは部位を同定した資料は136点で7B区と8C区で多く出土している。四肢骨では若獣と成獣しかみられなかったが、上下顎骨でみると幼獣・若獣・成獣のすべての年齢段階のものが含まれていた。イノシシは、部位を同定した資料は122点であり、シカと同様に7B区と8C区で出土量が多い。上下顎骨からみて、幼獣・若獣・成獣のすべての年齢が含まれている。この遺跡のシカとイノシシは、割れているものが多いので計測できる資料が少ないが、シカの上腕骨遠位部幅(8C区)46.0mm、トウ骨近位部幅(8C区)45.6mm、イノシシの下顎第3後臼歯(8C区)の長さ38.9mm、上腕骨遠位部幅(7B区)43.8mmのように、いずれもかなり大きいことが特徴である。おそらく縄文時代中期の関東地方のシカ・イノシシとほぼ同大であろう。

表2 哺乳類出土量

種名	部位	左右	残存部位	発掘区			
				7B	7C	8B	8C
サル	尺骨	左					1
	大腿骨	右	近位部♀	1			1
ウサギ		左	遠位部	1			
アナグマ	下顎骨	左	(12~M2)	1			
タヌキ	上顎骨	右	(P4M12)	1			1
	上顎遊離歯	右	M2				
			犬歯		1		1
	下顎骨						1
	下顎遊離歯	左	M1				1
	上腕骨	右	遠位部	1			
	脛骨	右	遠位部	1			
イルカ	歯			1			
	尾椎						1
クジラ類	椎骨						1

表3 シカ上・下顎骨及び遊離歯出土内容

部位	左右	残存部位	年齢	発掘区
上顎骨	右	(M12)	若獣	7B
	左	(m 234)	幼獣	8C
上顎遊離骨	右	M2	若獣	7B
	左	M3	若獣	7B
		M1		7B
下顎骨	右	(XX m 4 X)	幼獣	7B
		(m 4 M1)	幼獣	7B
		(M12)	成獣	7B
		(M23)	成獣	8C
		(M 3)	成獣	8C

部位	左右	残存部位	年齢	発掘区
	左	(M 3)	成獣	7 B
		(Xm34M12)	若獣	7 B
		(P 4)	若獣	8 B
		(M123)	成獣	7 B
		(P234X)	成獣	7 B
下顎遊離骨	右	m 3	幼獣	7 B
		I 1	成獣	7 B
		I 1	成獣	8 C
		M 2	成獣	7 B
		M 2	成獣	7 B
		M 3	成獣	8 C
		M 1		7 B
		M 1		8 C
		M 2		7 C
	左	I 1	成獣	8 C

注 () は顎骨の残存範囲を示す。I : 切歯 C : 犬歯 P : 前臼歯 M : 臼歯 X : 脱落歯小文字は乳歯を示す。

小型獣は、サルの大腿骨の右側が2点出土している。成獣であり、大きさから見て雌獣と思われる。その他にタヌキが少量とアナグマとウサギが各1点見られた。イルカ類は比較的大きなイルカの歯1点と尾椎1点である。クジラ類は椎骨の破片であり大きさは分からない。

表4 イノシシ上・下顎骨及び遊離骨出土内容

部位	左右	残存部位	年齢	発掘区
側頭骨	右			8 B
				8 C
	左			7 B
頭蓋骨片				7 B
上顎骨	右	(X m 4 M 1)	幼獣	7 B
		(m 3 4 M 1)	幼獣	7 B
		(M 1 2 3)	若獣	8 C
		(P 3 4 M 1)	成獣	7 C
	左	(M 1)	幼獣	8 C
		(X m 4)	幼獣	8 C
		(M 3)	若獣	8 C
上顎遊離骨	右	l 3	成獣	7 C
	左	i 3	幼獣	7 B
		P 2	成獣	8 C
		P 3	成獣	7 B
		M 2	成獣	8 C
		M 3	成獣	7 C

部位	左右	残存部位	年齢	発掘区	
下顎骨	右	(M 1 2 3)	成獣	5D	
		(XM 3)	成獣	8C	
	左	(x P 4M 1 2)	若獣	8C	
		(x M 1 x)	若獣	8C	
		(M 1 2)	成獣	7B	
下顎遊離骨	右	i 2	幼獣	6D	
		i 2	幼獣	6C II層最下層	
		i 2	幼獣	7B	
		i 2	幼獣	5D	
		m 4	幼獣	8C	
		♀ C	若獣	5D	
		♂ C	若獣	7C	
		I 1 2	成獣	5D	
		I 2	成獣	7B	
		I 3	成獣	8C	
		♂ C	成獣	8C	
		♂ C	成獣	8C	
		M 2 3	成獣	7C	
		M 3	成獣	7C	
		♂ C		8C	
		左	i 2	幼獣	5D
			i 3	幼獣	5D
			m 4	幼獣	5D
	I 2		若獣	7B	
	I 2		若獣	7B	
	M 2		若獣	7C	
	I 1 2		成獣	5D	
	I 1		成獣	7C	
	I 2		成獣	8C	
	I 2		老獣	8C	
	I 3		成獣	5D	
	I 3		成獣	8C	
	M 2		成獣	8C	
	♂ C		成獣	8C	
	♂ C		成獣	8C	
	不明	i 2	幼獣	7B	
		m 2	幼獣	8C	
		M 3	若獣	7C	

部位	左右	残存部位	年齢	発掘区
		C		8C

注() は顎骨の残存範囲を示す。I : 切歯 C : 犬歯 P : 前臼歯 M : 臼歯 X : 脱落歯 小文字は乳歯を示す。

表5 シカの出土量

部位	左右	残存部位	発掘区					
			6C	7B	7C	8B	8C	8D
頭蓋骨							1	
		後頭顆				1		
		破片		2				
角座	左				1			
	右			1			1	
角		破片		2	5		3	
上顎骨	左						1	
	右			1				
上顎遊離骨	左			1				
	右			2				
下顎骨	左			3		1		
	右			4			2	
下顎遊離骨	左						1	
	右			5	1		3	
環椎				1				
肩胛骨	左			3		1		
	右			2		1	1	
上腕骨	左	遠位部		2	2	1	1	
	右	遠位部	1	5	1	1	6	
橈骨	左	遠位部		1				
	右	近位部		3	2	1		
尺骨	左			1		1		
	右			2	1			
寛骨	左						2	
	右	近位部					1	1
大腿骨	左	遠位部		1				
		近位部		1			2	
脛骨	左	遠位部			1		1	
	右	遠位部		1			1	
踵骨	左			2	1		2	
	右			2	1		2	
	右			2		1	1	
中手骨		破片		1				

部位	左右	残存部位	発掘区					
			6C	7B	7C	8B	8C	8D
中足骨	右	近位部		1				
		破片		2				
中手中足骨		破片		1			7	
基節骨				2		1	1	
中節骨				1				
末節骨				3				
頸椎				2				
腰椎				1				
椎骨				2				
計			1	6 6	1 6	1 1	4 1	1

注 出土量は若獣と成獣を合計したもの。

表6 イノシシの出土量

部位	左右	残存部位	発掘区								
			不明	5D	6C	6D	7B	7C	8B	8C	8D
側頭骨	左						1				
	右								1	1	
頭蓋骨片							2			1	
上顎骨	左									3	
	右						2	1		1	
上顎遊離	左						2	2		2	
	右							1			
下顎骨	右			1							1
	左						1			2	
		下顎連合部					1	1			
下顎遊離歯	左			5			4	2		6	
	右			3	1	1	2	3		5	
		不明					1	1		2	
環椎										2	
肩胛骨	左						2	2		2	
	右						3	1		1	
上腕骨	左	遠位部					3	1		2	
	右	遠位部	1				7	2		1	1
尺骨	左									2	
	右									1	
橈骨	左	近位部					1				
	右	遠位部					1				
		近位部								1	
寛骨	左							1	1		

部位	左右	残存部位	発掘区									
			不明	5D	6C	6D	7B	7C	8B	8C	8D	
		破片					1					
大腿骨	左	遠位部							1			
脛骨	左	中間部					1	1				
		遠位部					1	1			1	
腓骨							2				1	
中手中足骨		遠位部									2	
中節骨		近位部					1	1			1	
末節骨						1			1	3		
踵骨	右								1	2		
	左					1				1		
距骨	左									1		
	右				1			2				
頸椎						1						
胸椎						2						
頸椎			1									
計			1	10	1	2	46	24	4	48	1	

注 出土量は若獣と成獣を合計したもの。

まとめ

横尾貝塚出土の動物遺体はシカとイノシシが主体である。そして、シカとイノシシの大きさが現代のものよりかなり大きいことが特徴である。魚類はクロダイ主体で、内湾の魚類を対象に漁労活動が行われていたと推測される。これらの資料は、九州地方の縄文時代前期・中期の資料として貴重なものと言える。



写真2 イノシシとシカ

1~4. イノシシ 5~12. ニホンジカ

1. 下顎骨 2・6. 肩甲骨 3・7. 踵骨 4・8. 上腕骨 5. 頭蓋骨 9. 橈骨 10. 尺骨 11. 脛骨
12. 大腿骨 (1・3・5・6・10は右側、他は左側)

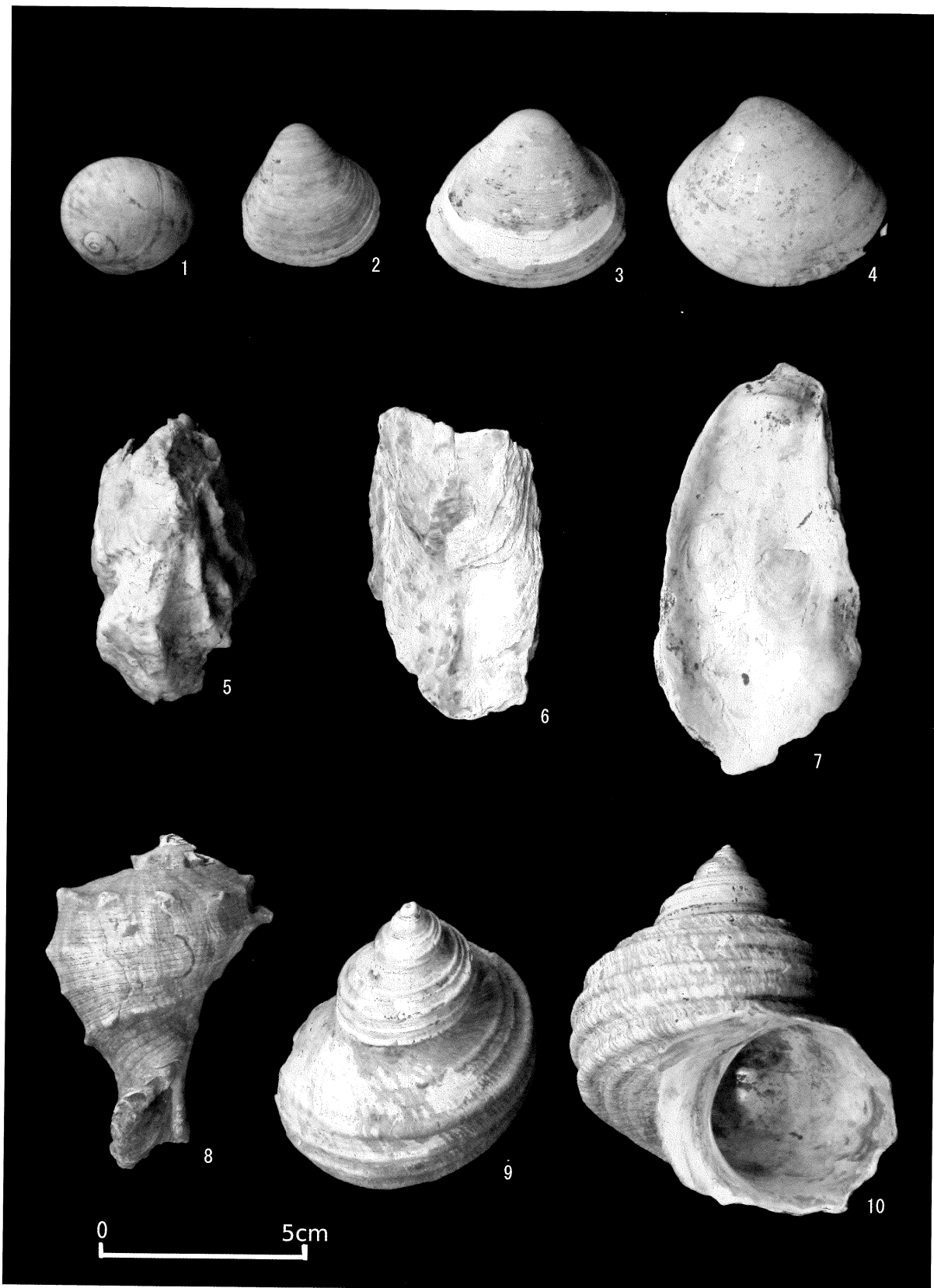


写真1 貝類

1. ツメタガイ 2. ヤマトシジミ 3. シオフキガイ 4. ハマグリ 5~7. マガキ(5. 歯左側。6・7は右側) 8. アカニシ 9・10. チョウセンサザエ

3. 横尾貝塚における貝類分析

小池 裕子 (当時 東京大学総合研究資料館)

大分県大分市大字横尾に所在する横尾貝塚には、長径 20 m にわたって貝殻の撒布が認められ、1980—81 年の発掘調査の結果、厚さ約 30 cm の未攪乱の貝層で構成されていることがわかった。加えてピット内にも 4 カ所にわたり貝層の堆積が検出された。これらの貝層を構成する貝類は、前期の層準の貝層はヤマトシジミ主体、中期の貝層はハマグリ主体となる傾向があるなど、横尾貝塚をとりまいてきた環境が少しずつ変化していることを示唆している。このような環境変化の影響は、貝殻の成長速度にも表れると考えられている。ここでは成長速度の分析の予報として 7C 区と 6C 区から出土したハマグリ成長をみてみよう。

〈ハマグリ成長速度〉

本遺跡出土のハマグリはあまり保存がよくなく、特に殻頂附近の外層が溶脱し、最初の冬輪が残存していない個体が多かった。成長速度が調べられた 9 個体の中で、早い時期の冬輪が検出された例 (7C-30) では第 1 冬輪が殻高 6 mm、第 2 冬輪が殻高 16.2 mm であった。従って他の個体の最初の冬輪として検出された殻高 13~17 mm の冬輪は、2 番目の冬輪に相当するものと思われる。その後第 1 冬輪から第 3 冬輪までの成長は非常に早く、第 3 冬輪ではすでに 25 mm から 31 mm に達する。第 3 冬輪以降成長速度は落ち、第 4 冬輪で殻高

33~37 mm、第 5 冬輪で 42~45 mm であった。一方 Walford の定差式といわれる方法を用いて満年齢における平均殻高を算定すると (図 1)、満 1 年で殻高 15.5 mm、満 2 年で殻高 27.7 mm と初期成長はかなり速いが、満 3 年では 37.5 mm、満 4 年では 45.4 mm、満 5 年では 51.6 mm と成長速度が遅くなっている。

横尾貝遺跡のハマグリ成長を現生ハマグリ成長と比較してみよう。県下の現生標本がまだ得られていないので、とりあえず博多湾奈多海岸産のハマグリを例にとる。Walford 法に基づく平均成長速度は、満 1 年で殻高 20.3 mm、満 2 年で 32.6 mm とかなり速く、満 5 年で 47.3 mm まで成長する。従って横尾貝塚のハマグリ成長速度は現生博多湾のものにほぼ匹敵すると言えよう。

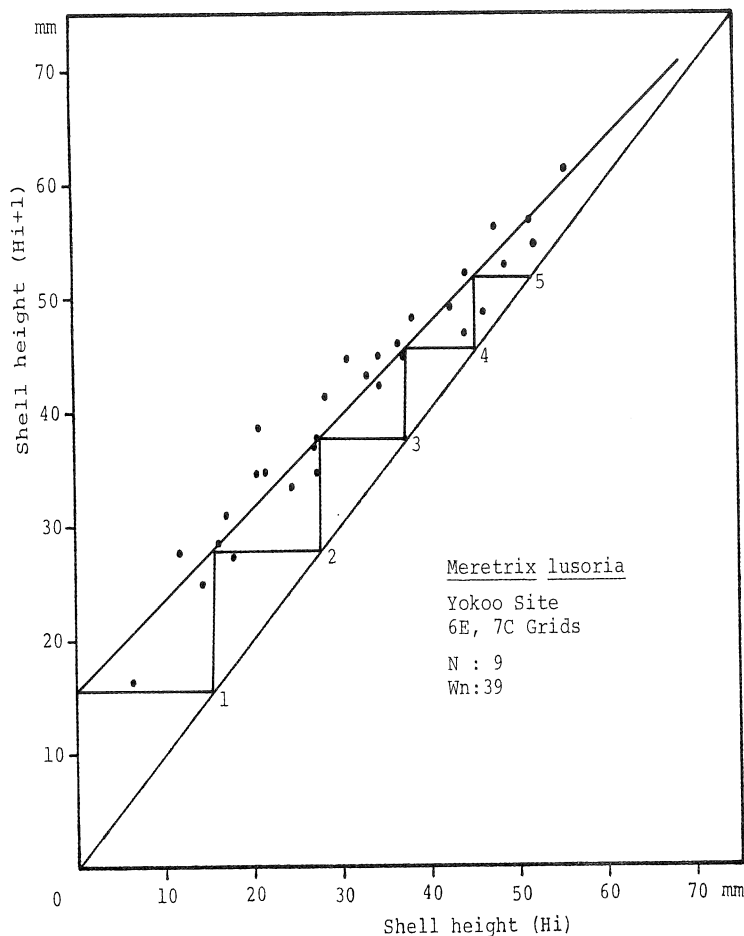


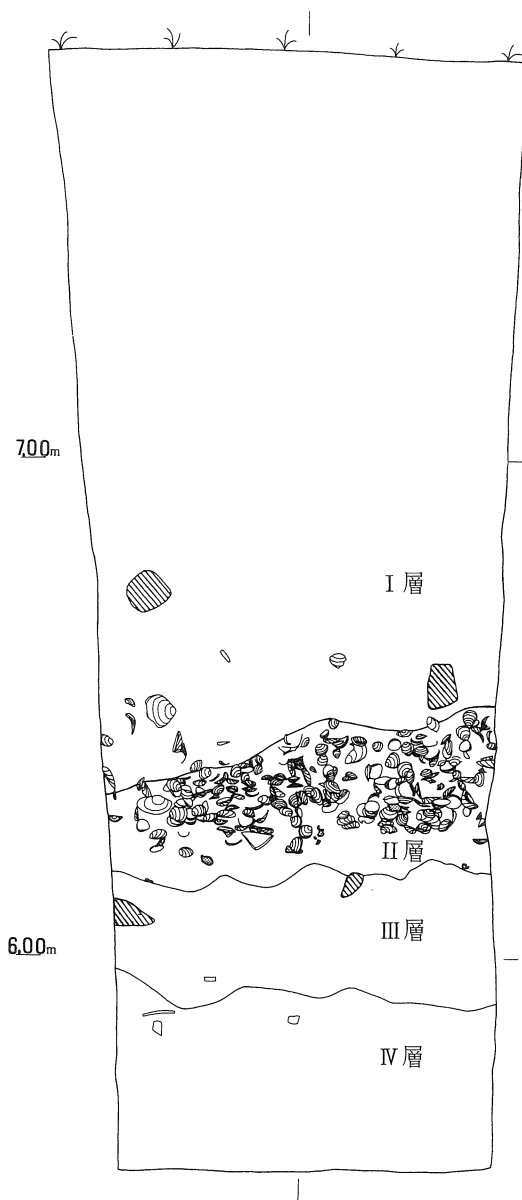
図1: 横尾貝塚6E区・7C区から出土したハマグリ成長速度 (数字1・2・3は満年の殻高成長値を示す)

〈季節推定〉

季節推定のためのサンプリングは1981年の2号ピット、7C区西壁、9C区東壁、5D区南壁および6E区西壁で行われた。そのうち6E区東壁の分析を終えたので予報として報告したい。

6E区西壁セクションの貝層

分析用貝殻のサンプリング方法は、まず堆積状況から判断して未攪乱と思われる貝層部分を対象に選んだ。セクション図(図2)に示すように、貝層セクションに表れた貝すべてについて貝殻の堆積の方向がわかるように貝殻自体をスケッチした。サンプリングは竹ペラで注意深く1点1点取りあげ、セクション図にその貝の番号を記録した。6E区西壁ではヤマトシジミ198個、ハマグリ18個の計216個の貝が取り上げられた。この中には貝縁が破損しているもの、チョーク化がかなり進行しているものなど保存の悪い貝も含まれていた。混貝は分析に耐えうる保存の良いヤマトシジミ66点を選び、常法によって採取季節を推定した。



- I層 …… 攪乱層。貝層直上まで二次的な堆積層。
- II層 …… 上部に貝層をのせた黄褐色土層。アカホヤ火山灰の小塊(網部)が貝層下部に有り、層全体がアカホヤの混入により黄味を帯びている。轟B式土器を包含。
- III層 …… 黒褐色粘質土層。早期包含層。
- IV層 …… 暗い赤褐色の粘質土層。上部に早期の遺物が包含される。

図2:6E区南壁

分析された66点の季節組成(図3)は、春の後半が多く、全体の約半数を占めた。次いで夏の前半・後半が多かった。貝の示す採取季節が貝層セクションでどのように分布しているかを調べてみると(図4)、6E区西壁の貝層は、貝層中の上方は貝の密度が高く比較的保存が良かったが、貝層の下面近くになると貝の密度が低く、分析可能な個体が少なかった。

この貝層の季節組成の中で主体を占めた春の後半に採取された貝(冬輪中心から60~90日)は、西壁の向かって左上方に密集している。同時期の採取季節をもつ貝が集中している箇所を探してみると、セクション中央部に160~190日前後に採られた貝が多く出現

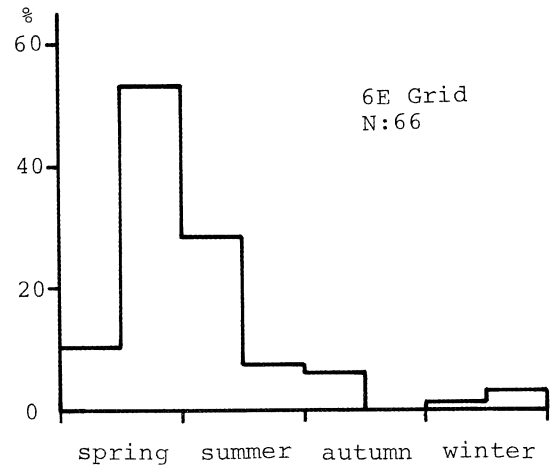
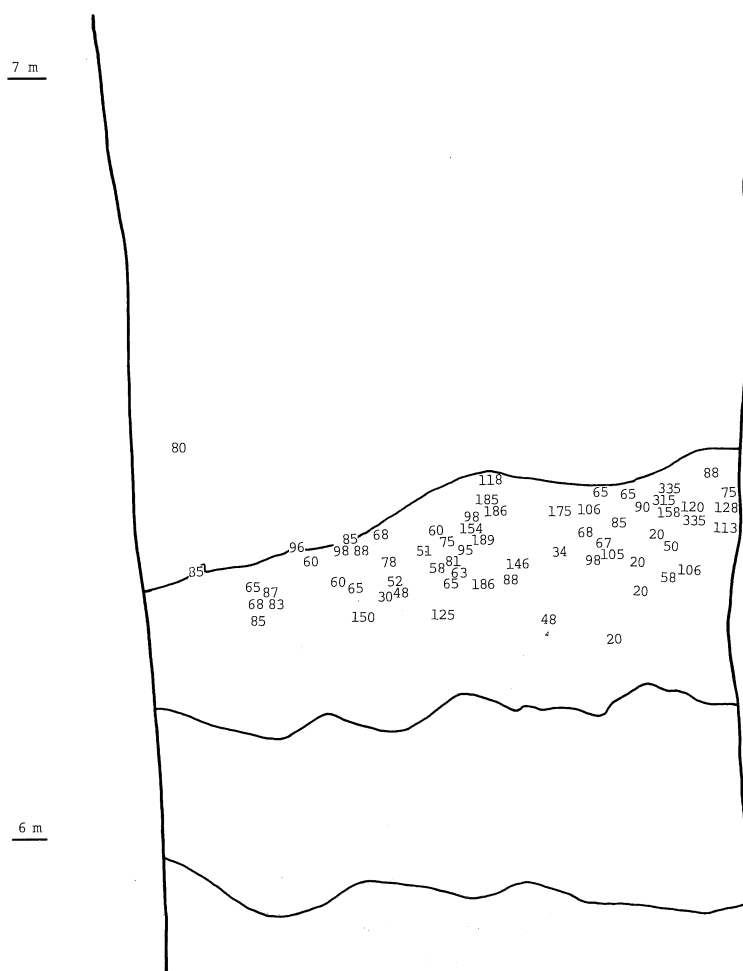


図3: 6E区西壁からサンプリングされたヤマトジミの採取季節



6E区南壁の貝採り上げ番号

し、右手下面には春の前半に採られた貝、右手上方近くに冬の300日以後に採られた貝が密集しているのが読みとれる。このように6E区西壁セクションに示された貝の採取季節の分布はかなり複雑な様相を示す。ここに示された推定の季節の集中が層位的にどのような位置関係にあるのか、今後分析数を増やしながらか検討を続けたい。

第5章 まとめ

古墳時代・弥生時代等について

縄文時代包含層の上部に弥生時代・古墳時代遺物包含層が重複し、礫が一面に散乱し数カ所にまとまりが認められた。弥生時代の遺物は中期後半から後期前葉のものであった。隣接する大分市調査区では包含層出土の下城式甕1点が報告されているだけであり、弥生時代の中心は貝塚付近であろう。また、大分市調査区では古墳時代遺物の報告が見られないのでこの時期も貝塚付近でこじんまりと短期間生活した場面があったようである。古墳前期の竪穴住居跡1基が5・6区において縄文時代の層に切り込んで掘られていたが、完掘せず埋め戻して調査を終えたので、今後調査が可能である。

遺物について

調査中の観察では貝層からは前期・中期の遺物が主に出土し、後期は大部分が貝層よりも上の土層から出土する状態であった。遺物が年代順に堆積しているのかどうかを確認するため作成したのが第1図である。時期別の土器出土状態投影見通し図を作成したものを集成した。前期の轟式、中期の船元式・阿高式、後期の西和田式・中津式について報告の部分で平面図と見通し図を示した。

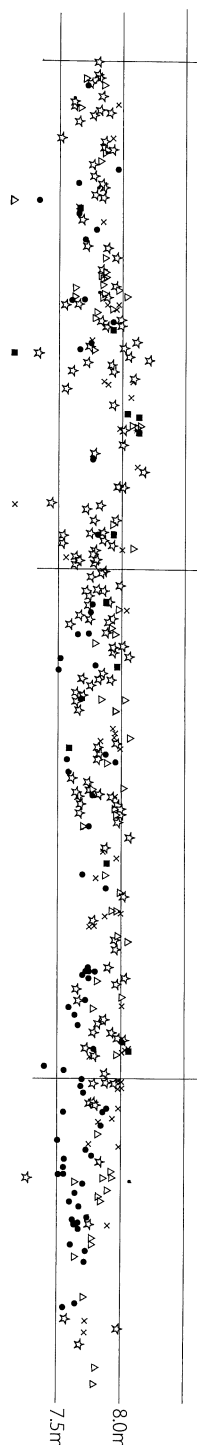
これらの見通し図を同じ面に投影すると前期の轟式土器(●)が最下層にあり、その上位に中期の船元式土器(☆)が分布することが分かる。また、後期初頭の中津式土器(×)と西和田式土器(△)の分布状態を船元式と比べると中津式と西和田式が相対的に高い位置から出土する状況が浮かび上がる。中期後半の阿高式土器は数量が少ないため明瞭ではないが、船元式分布幅の上部にあるものが多い。一部は貝層上部に投影できる。しかし、異なる時期の遺物が上下に移動して同一面に混在していることも否定出来ない。当時の人々による攪乱や後世の樹根・小動物による移動などで本来の整合的な堆積が乱されたとみられる。

縄文時代早期の土器

早期の遺物包含層を5D区のトレンチ部分で確認した。この部分では土器は見られなかったが、焼けた礫の分布が認められた。早期末としては轟1式(第51図1)が1点だけ出土した。この段階かと思われる平底の轟式が大分市教委の調査でも報告されており、調査範囲を広げれば周辺や下層にこの型式土器が存在するとみられる

縄文時代前期の土器

前期は貝層下部とその下位の土層から出土した。第46～56図は前期の轟4式・5式土器である。外面に粘土紐を貼り付け紋様としたものが多い。上下の貼付け突帯の間に丸く凹みをもつのは相対的に古く位置づけられ(轟4式)、突帯の間が平坦になり、さらに時期が新しくなるにつれ突帯の数が減少する傾向のある土器である。同時に突帯の断面が丸みを帯びてゆく。轟式以外に九州系の前期末土器では曾畑式土器が数点みられる。列点文土器としたものは轟4式・5式前後に九州東北部から瀬戸内西部を中心に分布する土器である。山口県の月崎下層式や彦崎Ⅱ1式、羽島下層Ⅱ式に類似する。前期後半の近畿地方の大歳山式土器が出土しているのは九州では珍しい存在である。引き続き前期末の瀬戸内の里木Ⅰ式土器がみられる。



第1図 時期別土器投影図

縄文時代中期の土器

まず、近畿地方由来の鷹島式土器が数点みられる。次いで中期前半の主体的土器は西日本に広く分布した船元式土器の第1・第3・第4様式土器である。本文中でも触れたが円形刺突紋を一要素とする第2様式土器が1点も出土しておらず、わずか20 km程度離れたエゴノクチ遺跡では逆にある程度みられること、隣接する大分市調査区では船元式土器がまったくみられないこと等から、船元第2様式の時期には横尾貝塚は無人だったと考えられる。

縄文時代中期には南九州に独自の土器文化が併存していたが、横尾貝塚ではそれらは1点も出土しておらず、この時期の大分県は瀬戸内土器圏に入っていたことになる。かつては、阿高式土器が中期の大半の時期と地域を占めると誤解されていたが、船元式土器が九州北部から南部のかなりの範囲に分布したと考えられるようになった。横尾貝塚では前期の大半が九州系土器であったのが、前期末から中期前半・中頃までは瀬戸内的な土器が主体的な存在であったことになる。

しかし、船元式土器が次第に在地化した状況が底部の特徴から窺える。鷹島式から船元式初期（第1様式）には底面が五角形の土器が存在するのが一般的で横尾貝塚でも出土しているが、別にコブ状の突起がおそらく五個つく底部も出土している。5突起底部と呼びたい。類例は九州各地に存在するのでどの時期の土器に共存するか船元式における底部の状況を検討してみると、五角形底部は鷹島式から船元第3様式（Ⅱ式）まで存在すると共に5突起底部が船元Ⅱ式段階にのみ存在することが分かる（第1表）。他遺跡では裏返して見ると底の輪郭が五角形になる例があり、五角形底部から5突起底部が派生したことを示している。

5突起底部が九州以外には存在するのはいくつかの遺跡を調べてみた。愛媛県江口貝塚は前期から中期全般の土器が少数出土し五角形底部土器が1点報告されているだけであるものの、5突起底部やそれに近い土器片も出土していない（宮本一夫他1991「江口遺跡第1次調査」愛媛大学法文学部考古学研究所報告第1冊 愛媛大学法文学部考古学研究室）。

島根県陰田第7遺跡では大歳山式・鷹島式・船元Ⅰ～Ⅲ式があるが底部は五角形5点であり、その他は平円形が多く、高台状底部や丸底が少数みられる（植田真他1984「陰田」米子市教育委員会）。里木Ⅰ式、続く船元式全期間から次の里木Ⅱ・Ⅲ式が多量出土した岡山県里木貝塚には5突起底部は存在しない（間壁忠彦1971「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号財団法人倉敷考古館）。徳島県荒川遺跡ではⅡ～Ⅳ式等が出土しているが平円のみである（大北和美他2005「荒川遺跡」徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第61集徳島県教育委員会）。

和歌山県鷹島では鷹島式は五角形底部だけである。なお、同書で巽三郎氏が「九州地方の中期の竹崎式も、鷹島式との関連を考えさせる土器である。これは、底の周辺に突脚を4～5個つけたものである」として、底部の特徴を指摘している（巽三郎・中村貞史1969「鷹島」南紀考古同好会）。

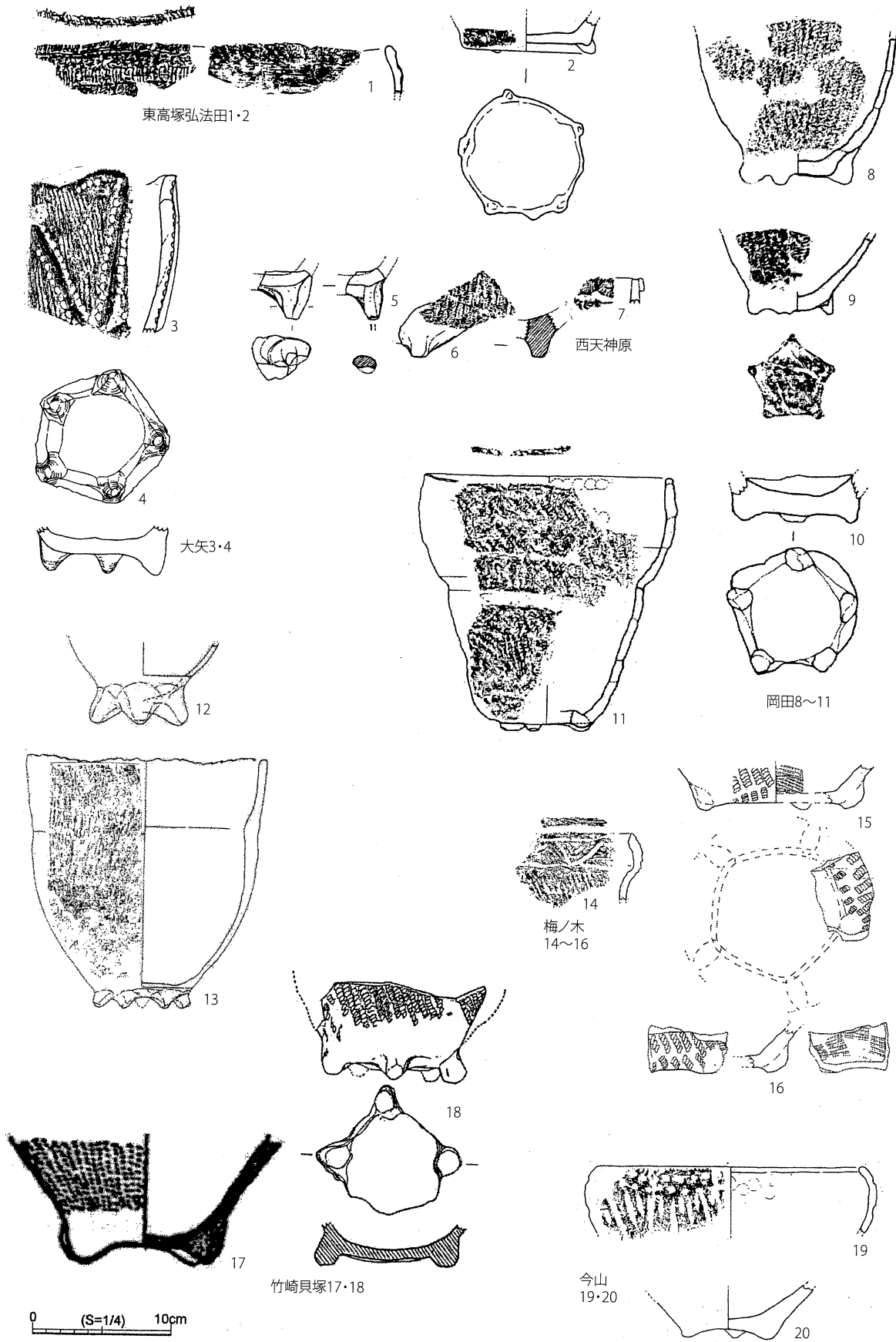
粟津湖底第3貝塚は第2様式（※様式は文末表参照）から第3様式の土器が層位的に出土しているが、底部は一般的な平底の円形であり五角形や突起をなすものはみられない。従ってこの地域では五角形底部はかつて存在したとしても第1様式内で終えたい（瀬戸口眞司他1997「粟津湖底第3貝塚」財団法人滋賀県文化財保護協会）。

岡山県備前市長縄手遺跡では中期末の土坑から船元Ⅳ式ないし里木Ⅱ式も出土していて、突起底部1点が共存している（船元式底部集成図2）。

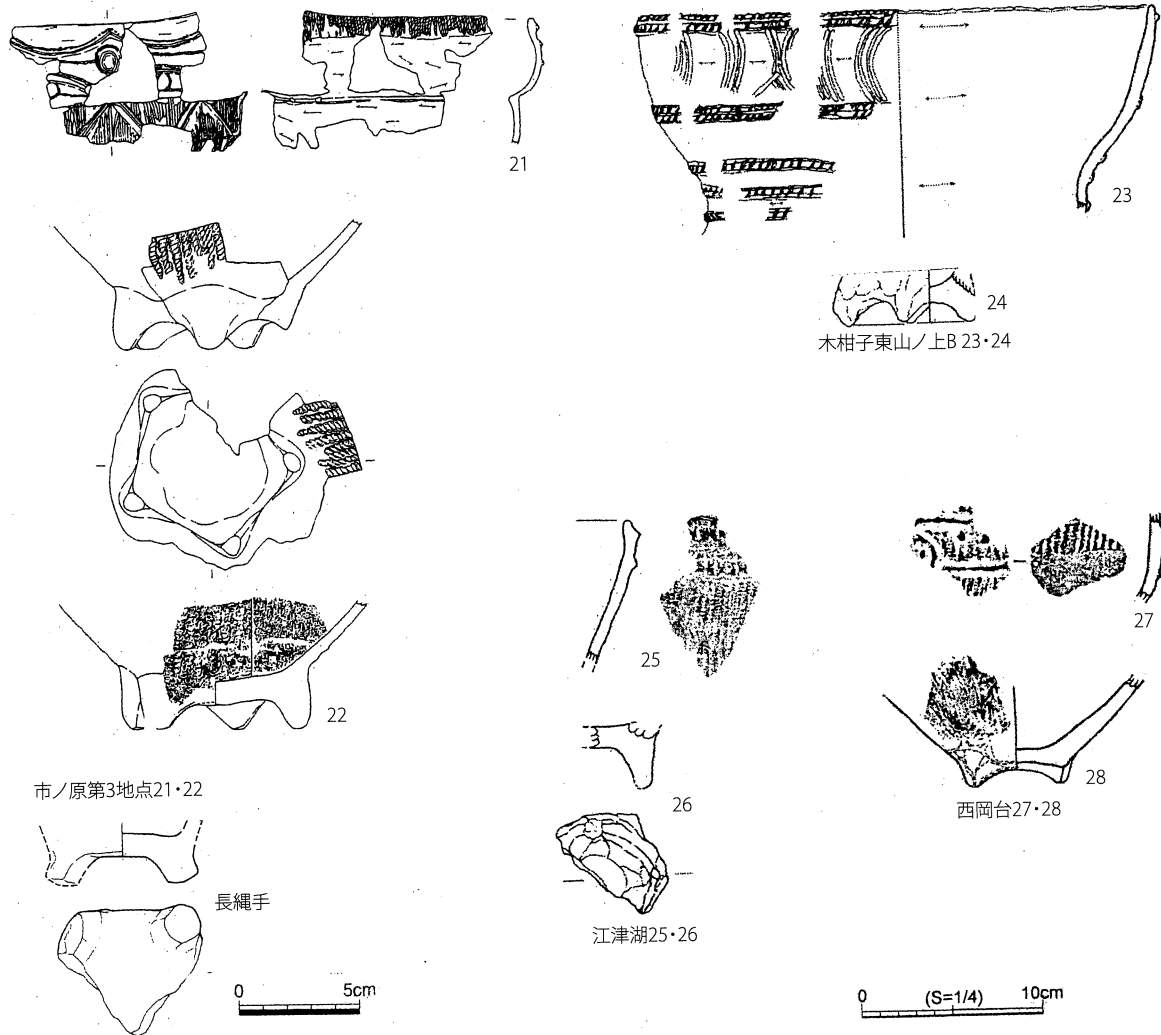
以上によれば、岡山県長縄手以外は九州内の遺跡であること、多量且つ長期の船元式が出土している里木貝塚に5突起底部が見られないこと等から5突起底部は第3様式の段階におそらく九州で作られた五角形底部の変形版と考えられ（熊本県岡田遺跡では第2様式に遡るか）、横尾貝塚では船元Ⅱ式段階には瀬戸内よりも九州内との交流を強くしていたと考えられる。

船元式の刻み目突帯は初め薄い粘土紐を貼付け、その後刻みを入れるという手順を踏んでいるが、貼り付けるというのは縄文地に刻むと紋様が鮮明にならないので刻む前段階に粘土紐を貼る必要があると考えたのであろう。次第に粘土紐が厚みを増し、同時に粘土紐を貼り付ける目安の二本線だけで済ます場合が生じたようである。

その過程を示すのが第65図8で、二本沈線→粘土紐貼付→刻み目の順が観察できる。



船元式底部集成図1



船元式底部集成部2

※船元式底部集成図に掲載した遺跡：福岡市今山・福岡県築上郡築城町東高塚弘法田・佐賀市東古賀・熊本県杵築市木柑熊本市江津湖・熊本市水源地・熊本県宇土市西岡台貝塚・熊本県天草市大矢・熊本県菊池市木柑子東山ノ上B・鹿児島県日置市市ノ原第3地点・岡山県備前市長縄手

阿高式土器（第75・76図）は器面に二枚貝条痕を残さず、指先による太い沈線である凹線により口縁部或いは胴部までも幅広い紋様を施すものである。出土した阿高式土器は胎土に滑石を多量混入し光沢があるものが半分、そうでないものが半分の比率であった。

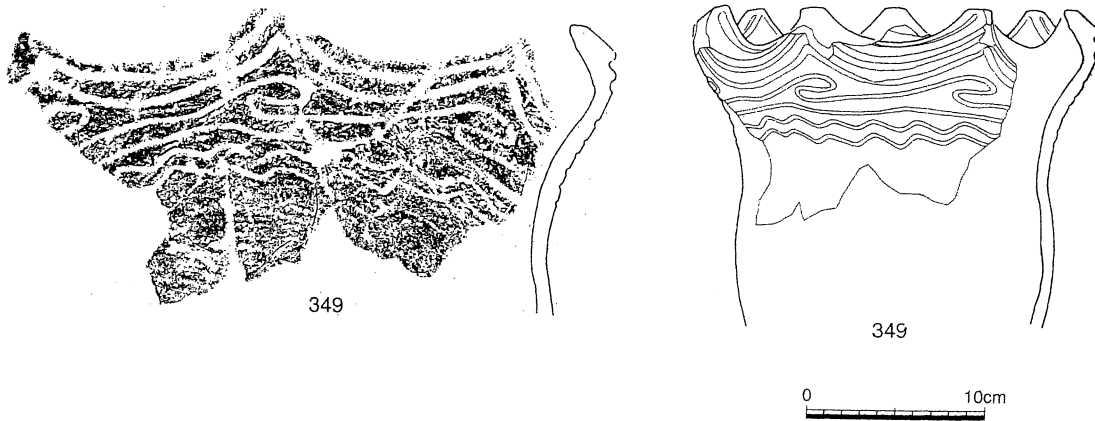
縄文時代後期の土器

後期の土器はほとんど前半に属するものであった。口縁部にいくつか山状に突出させた土器（第94図21・22）は、中期末の北白川C式土器の影響をもつものである。中津式土器の内、J字文（第94図14・第96図1）や口縁上端に平行にある縄文を含み窓枠状の紋様（第93図23・第94図1・4・7・10）のものは中津I式、口縁上端の縄文を失い（第95図8）、二段の渦巻き文をもつもの（第93図3）はII式であり、ある程度の年代幅のある土器がみられる。第113図の沈線文土器は口縁上部の列点を除けば中津式土器に近い。中津式に後続する福田K II式（第102図12・20、第101図25）、北久根山式や片粕式頃の土器（第101図18、第102図18）が少量ある。

第 105 図の土器は以上のどれかに伴うものであろう。

横尾貝塚出土の第 108 図は型式名のない土器である。岡山県長縄手遺跡で 1 点（深鉢 6 類 349）類似点のある土器が見られる。同遺跡土器は中期末の古段階（北白川 C 式 3 期）、新段階（北白川 C 式 4 期）に分けられた中の古段階とされているので第 108 図例は中期末か？ 但し、349 は土壙 4 出土であり、他の古段階の遺物は相伴していない（福本 明 2005 「長縄手遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 189 岡山県教育委員会）。第 108 図は波状口縁をなすことや口縁部紋様が頂部を中心に展開する点は、中津式土器の一部に類似し、大分県を中心に分布する後期前葉のコウゴ-松式が波状口縁である点と沈線文の一部が類似することなどコウゴ-松式とも関係があると考えられる。第 102 図 2 は同 1 に列点の位置が類似するが、口縁上端が内湾することや口縁状部の狭い紋様の存在から第 108 図に似ている。

横尾貝塚では後期前葉の西和田式土器が多数みられる。西九州・中九州の中期後葉土器である阿高式の系譜に連なるとされている。内面に二枚貝条痕がなく、指先による紋様をもった第 79 図の土器は西和田式でも古い頃のものであろう。施文を指先で行う凹線の土器と別のもので行う沈線文とが出土しているが、横尾貝塚で



長縄手遺跡土器

は凹線が主体を占めている。西和田式に類似し口縁部に刻み目突帯をもつ土器は従来の西和田式には少ないが、横澤慈によれば「西和田式に後続すると考えられるのが沈線文土器と口縁部を肥厚又は隆帯を施し、下位に沈線文を施すものである。沈線文は西和田式の凹線が細く沈線化したもので、モチーフは西和田式と同様のものもあれば、中津式的な文様モチーフで縄文を欠くものや、3 本沈線で福田 K II 式的なものもある。口縁部形状では波状口縁も多数認められ、ここにも中津式の影響を見ることができる。隆帯+沈線文土器も同様で、西和田式的な文様モチーフから沈線文様幅が狭く斜位、菱形状の文様が展開するものもある。後者はコウゴ-松式や綾式と文様が類似しており、コウゴ-松式も口縁下に刻目隆帯を施すものがあることから、極めて近い関係にあると言える。また、小池原貝塚では刻目隆帯とその下位に福田 K II 式的な文様モチーフを施す土器（大分 24-1・2）も見られる。以上のことから、これらの土器は中津式後半～福田 K II 式にかけて存在するものと考えられるが、口縁部の肥厚は中津 II 式にも見られる特徴である。また、口縁部形状の類似から、山口県を中心に分布するとされる屋敷式との関係も注意する必要があるだろう。」（横澤慈 2011 「大分県における中津式・福田 K II 式土器併行期の概要」『九州における縄文時代後期前葉の土器—中津式・福田 K II 式を中心として—』）とされ、コウゴ-松式との関係が指摘されている。

横尾貝塚では鐘崎式系統の土器もかなり出土している（第 103 図・104 図）。鐘崎式は口縁部が極端に肥厚、屈曲するのに対し横尾貝塚では口縁部の肥厚が少ないものが多い。口縁部紋様は半円形弧線を複数向き合うものに口縁部肥厚が少ない傾向がある。胴部は紋様帯が広い。後期前葉から中頃の池原上層式である。

第 110 図の土器は山形の波状口縁で口縁外面には帯状の肥厚部があり刻み目を付けたものが多い。頸部・胴部には沈線で区画された内部を中心に列点が入れられており、コウゴー松式土器である。

他に少数であるが三万田式土器（第 119 図 1～3）、晩期中頃の土器（第 119 図 4・5）、晩期後葉の無刻み目突帯文土器、晩期末あるいは弥生早期の刻み目突帯文土器（第 119 図）6～8・11）が出土している。

埋葬人骨について

横尾貝塚では合計 17 体の人骨が出土した。このうち、単体で埋葬されていたのは 3 号・5 号・6 号・10 号の 4 体であり、他は結果的に一箇所に改葬人骨を複数回埋葬した状態のものであった。埋葬人骨には魚骨製装飾品の他、副葬品がなかったのものでそれ自体で年代を推定できなかった。6 号埋葬人骨は貝層が一部覆う状態から貝層形成過程での埋葬とも考えられる。10 号・11 号は貝層上部から掘り込まれたことが明らかな検出状態であった。2 号～9 号は重複して出土したが埋土内に貝層が認められたので貝層形成中の埋葬と考えられる。出土した 5 体については放射性炭素年代測定を行ったので前述のように以下の結果が得られている。

4683 ± 35BP (2 号人骨)・4371 ± 36BP (6 号人骨)・4675 ± 35BP (7 号人骨)・4759 ± 37BP (8 号人骨)・4406 ± 36BP (10 号人骨)

出土状態から貝層よりも後の埋葬と考えられた 10 号人骨は 4406 ± 36BP であるのに対し、貝層形成中と考えた 6 号人骨は 4371 ± 36BP はやや新しい年代を示すので、出土状態から 6 号は貝層分布域の周縁にあり、一部だけ重複していたので貝層形成中とみたのは誤りの可能性がある。

以上の結果、単体埋葬であり、かつ改葬ではない 4 号・6 号・10 号・11 号人骨は前期・中期に形成された貝層よりも新しい時期と考えられ、一方、改葬墓である 2 号・7～9 号人骨は貝層形成過程での埋葬であると考えられる。改葬墓は一度どこかで埋葬した人骨を取り出し、改めて葬る型式の葬法である。縄文早期には大分県二日市洞穴・長崎県岩下洞穴があり、前期には佐賀県菜畑遺跡、後期では大分県粉洞穴に見られるが普遍的ではなく、九州内では非改葬例の方が多いという（坂本嘉弘 1997「九州における縄文時代の葬制」『古文化談叢』第 37 集 九州古文化研究会）。

炭素年代測定値に関連して

貝層貝殻 8 点の放射性炭素年代測定値は、4851 ± 25BP ～ 5076 ± 22BP に集中する資料 1～6 と 5798BP ± 24・5832BP ± 24 の資料 7・8 の二つに分かれた。BP とは炭素年代測定法が始まった 1950 年から何年前か、という意味である。これらの年代をどう理解すればよいのか考えてみる。

前者の年代は船元 I 式から II 式を主体とする短期間に形成された滋賀県粟津湖底遺跡第 3 貝塚の測定値に近い。同貝塚では 4090 ± 70 年前から 5080 ± 80 年前までの範囲に収まる 19 点の測定がなされており、最多は 4600 年代の 3 点、次ぐのは 4900 年代の 2 点であり船元式の年代を考える参考資料となる（中村 1997）。横尾貝塚では前期初頭の鷹島式から前半・中葉の船元式が多く見られ、土器型式では粟津遺跡第 3 貝塚の時期を含んでいる。横尾貝塚では大分県教育委員会が調査した後、範囲確認調査が繰り返し行われ、報告書が 2008 年度に刊行されている。その中で今回報告する調査で出土した埋葬人骨について放射性炭素年代測定等が行われ、以下の結果が示されている（大森・中村 2008）。4683 ± 35BP (2 号人骨 YKS-2)、4371 ± 36BP (6 号人骨 YKS-6)、4675 ± 35BP (7 号人骨 YKS-7)、4759 ± 37BP (8 号人骨 YKS-8a・b)、4406 ± 36BP (10 号人骨 YKS-10)。6 号人骨・10 号人骨には海洋食資源の利用傾向が顕著に表れ、2 号・7 号・8a・b 人骨には摂取した食物重量で約 8 割程度が植物起源であり、陸上動物をタンパク源とした割合が約 3 割程度、海産性食資源のタンパク質寄与率は約 2 割程度であった。人骨の示す年代は粟津における船元式土器の年代に収まるものであり、人骨は船元式の時期に埋葬されたと考えられる。

横尾貝塚で得られた貝殻による 14C 年代値 5798BP ± 24・5832BP ± 24 に近い測定値としては、関東地方の

前期後半の土器型式である諸磯 b 式が 5950 ～ 5750 年前頃、諸磯 c 式は 5750 ～ 5600 年前頃であるという（小林 2007）。横尾貝塚で得られた年代はどちらかと言えば諸磯 b 式に近い値であるが土器の編年的位置づけでいえば、横尾貝塚で貝層の形成が始まった轟（3・4・5）式土器は前期前半の型式である。

貝層の形成と海面変動について

横尾周辺での沖積平野の形成史を竹村恵二氏が次のように述べている。18,000 年前頃の最終氷期には気温が低下しており地球上の水分は氷となって大陸に被さっていた。海面は現在よりも 120m 程度低く、横尾周辺の沖積層を剥いで現れる谷地形基底は大野川河口域で現海面下 70 ～ 80m ほどにあり、中戸次辺りでは海拔 0 m 程度である。その後徐々に進行した温暖化に伴い海面が上昇すると共に内湾性の粘土層の堆積が進み、以前の谷地形の中に内湾環境が出現した。最大海進時（最も暖かかった約 7,000 年前の縄文時代前期初頭頃には縄文海進という海面が現在よりも 2 m ほど高い状況が現れた）には少なくとも横尾貝塚付近まで海域となり、厚い沖積粘土層が堆積した（竹村 2008）。

〈前期〉

横尾貝塚では 5D 区で顕著であるように約 7,300 年前のアカホヤ火山灰層よりも上に位置する前期の轟 3 式・4 式・5 式の時期に貝層が初めて形成され、それはヤマトシジミ主体でマシジミ・マガキが少量伴う。この層の広がりには調査が限定的なものであったため大部分は現地に残されている。ヤマトシジミは海水と川の水が入り交じる河口のような汽水域に生息する貝であり、マガキは潮の満ち引きで海底が現れたり沈んだりするようなやや塩分の少ない内湾の岩礁に固着する貝である。また、マシジミは河川の中流域から上流域の淡水に生息する種類である。このように遺跡周辺で採集可能な貝はヤマトシジミを主とし、マシジミ・マガキが少量伴う状態であることから縄文時代前期当時、貝塚周辺は河口域から中流域にかかるような環境にあったとみられる。5D 区貝層上部のヤマトシジミの放射性炭素年代測定値は前述のように $5798 \pm 24BP$ ・ $5832 \pm 24BP$ である。

貝層が形成された横尾貝塚は、前期前半になって初めて付近で貝類の採集が可能になったとみられる。

〈中期〉

年代測定した貝殻 8 点のうち 6 点は $4851 \pm 25BP$ ～ $5076 \pm 22BP$ に集中するものであった。中期前半頃に相当する年代である。5D 区貝層を典型的な前期貝層とすれば中期に該当する年代の出た他の場所とどう違うのか見ておきたい。

厚さ 5 cm ずつで集成した貝類分布状況を見ると、7B 区・8B 区・9C 区において貝層の上部にハマグリが多く、下部にヤマトシジミが多いという傾向がうかがえる。ハマグリは多少淡水の流入する内湾の砂泥底に生息する貝であり、アサリやシオフキが生息する砂泥底よりも深い海に分布する。ヘナタリは河口など淡水の影響がやや強い汽水域の干潟に生息する。従って、貝層の上部では前期に比べ河口が後退し、貝塚の場所よりも内陸側に海岸線が移動していたと考えられる。ハマグリの出現の意味するものは、前期よりも中期前半の方が海面が上昇していたと考えるべきか、貝の採集場所が単に違ったということかは分からないが、地域的な海水面の変動を示す事例と考えたい。

〔引用文献〕

- 中村俊夫 1997 ……「滋賀県栗津湖底遺跡の第 3 貝塚から出土した木片、骨、シジミ貝の加速器質量分析法による放射性炭素年代」『栗津湖底遺跡第 3 貝塚』財団法人滋賀県文化財保護協会
- 大森貴之・中村俊夫 2008 ……「横尾貝塚遺跡出土人骨による 14C 年代測定と食料解析」『横尾貝塚』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 83 集 大分市教育委員会
- 竹村恵二 2008 ……「横尾貝塚周辺の地質と地形、および横尾貝塚立地との関連」同上
- 小林謙一 2007 ……「縄文時代前半期の実年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 137 集

間壁忠彦氏の編年案→	船元I式B類	船元I式A類	船元II式	船元III式	船元IV式/里木II式	里木III式		
泉拓良氏の編年案→	鷹島式・第1様式	第2様式	第3様式	第4様式	第5様式	第6様式	五角形底部	突起底部
宮崎県清武町 辻遺跡	2点							
宮崎県美郷町 内野々遺跡	第1様式189~197							
同上		第2様式136~142					154は五角形底部(の一角)2011第202集	
熊本県菊池市 岡田遺跡	第1様式1~6							
大分市 横尾貝塚	鷹島式							
福岡県福岡市 四箇遺跡	鷹島式							
鹿児島県伊佐市 松美堂遺跡		第2様式1						
鹿児島県末吉町 桐木・桐木耳取遺跡		第2様式17						
鹿児島県加治木町 干迫遺跡		第2様式7・8						
鹿児島県日置市 市ノ原遺跡第3地点		第2様式5-船元I式類						
鹿児島県南さつま市 上水流遺跡		第2様式a期7~9						
宮崎市 右葛ヶ迫遺跡		第2様式b期35~37						
宮崎県西都市 宮ノ東遺跡		第2様式b期他106~113						
宮崎県高鍋町 下耳切第3遺跡		第2様式他804						
宮崎県北方町 笠下原遺跡		第2様式a期						
熊本県菊池市 岡田遺跡							五角形底部	
熊本県宇土市 轟貝塚		第2様式6						
大分市 横尾貝塚							五角形底部	
大分県日出町 エゴノクチ遺跡	第1様式						五角形底部	
大分県豊後高田市 西村遺跡		第2様式b期						
大分県日田市 宇土遺跡		第2様式						
長崎県雲仙市 百花台遺跡		第2様式						
長崎市 深掘遺跡		第2様式b期2・6						
長崎県佐世保市 宮ノ本遺跡							五角形底部	
長崎県小値賀町 野首遺跡		第2様式						
佐賀県鳥栖市 西田遺跡		第2様式						
福岡県久留米市 市ノ上北屋敷遺跡		第1様式					五角形底部	
福岡県小郡市 横隈山		第2様式						
福岡県築上町 東鷹塚弘法田遺跡	第1様式						五角形気味底部	
福岡県鞍手町 新延貝塚				第4様式				
福岡県芦屋町 山鹿貝塚		第2様式						
佐賀県 九郎遺跡	第1様式※要確認							
鹿児島県鹿屋市 榎木原遺跡			第3様式a期6					
鹿児島県日置市 市ノ原遺跡第3地点			4・5				突起底部、集成で鷹島式という一新しそう	
熊本県人吉市 白鳥平B遺跡			第3様式57~80					
熊本県五木村 頭地田口A遺跡			第3様式481~504					
熊本県天草市 大矢遺跡			第3様式					5突起底部
熊本県宇土市 西岡貝塚			第3様式					5突起底部
熊本県城南町 西天神原遺跡								5突起底部
熊本市 広木遺跡								5突起底部
熊本市 江津湖遺跡								5突起底部
熊本市 水源地遺跡								5突起底部
熊本市 石の本遺跡			?					
熊本県菊池市木柑子東 山ノ上B遺跡			?					
熊本県菊池市 岡田遺跡			第3様式				五角形底部、円形刺突無。単純2期。	
熊本県玉名市 尾田貝塚			?					5突起底部
熊本県 梅ノ木遺跡							五角形底部	
熊本県玉名市 竹崎貝塚			時期?					5突起底部
大分県豊後大野市 惣田遺跡								
大分市 横尾貝塚			第3様式					
大分県日出町 エゴノクチ遺跡		第2様式a・b期						
大分県宇佐市 須久保遺跡			第3様式					
大分県日田市 鳥ヶ塚遺跡			第3様式					
大分県日田市平草遺跡			第3様式					
長崎県雲仙市魚洗川D遺跡			第3様式					
長崎県雲仙市 百花台遺跡			第3様式					
長崎県大村市 玖島城跡			第3様式					
長崎県諫早市 小野条里遺跡			第3様式					
長崎県諫早市 伊木力遺跡			第3様式					
長崎市 深掘遺跡			第3様式b期8					
長崎県平戸市 供養川遺跡			第3様式					
長崎県平戸市 千里ヶ浜遺跡			第3様式					
長崎県五島市 宮下貝塚			第3様式					
長崎県小値賀町 野首遺跡			第3様式・渦巻文A種					
長崎県佐世保市 宮ノ首遺跡			第3様式					
佐賀市 西畑瀬遺跡			第3様式					
福岡県久留米市 安国寺遺跡			第3様式					
福岡県芦屋町 山鹿貝塚			第3様式					
福岡県宗像市 沖ノ島社務所前			第3様式					
福岡県芦屋町 山鹿貝塚							(水ノ江1999によれば)	
福岡県鞍手町 新延貝塚							(水ノ江1999によれば)	
宮崎市 上ノ原遺跡				第4様式212~218				
宮崎県北方町 笠下原遺跡				?				
熊本県西原村 べつじ遺跡				第4様式				
熊本県菊池市 岡田遺跡	第1様式							
大分県日田市 大肥吉竹遺跡				第4様式				
福岡県小郡市 横隈山				第4様式				
佐賀県唐津市 菜畑遺跡					第5様式 深淺縄文			
佐賀市 東古賀遺跡						第6様式		5突起底部・平底部

上記の表は主に、九州縄文研究会2010「九州の縄文時代中期土器を考える」第20回九州縄文研究会 佐賀大会発表要旨資料集により、一部報告書等を参考にして作成した。

以下の記述は泉による。

※前期末の大蔵山式の多角形底の系譜。

	深 鉢	口 縁 部	底 部
第1様式	キャリバー形の口縁部。屈曲部内面に段。	酒杯状突起のつく例がめだつ。	五角形底※
第2様式 a・b			やや上げ底
第3様式 a	屈曲がなだらか。		凹底
第3様式 b	口縁部と胴部の境が区別できない。		
第4様式			
第5様式 a	頭部無文帯の出現に伴って、ふたたび口縁部がキャリバー形を呈する←加曾利E第2様式の影響。		
第5様式 b			
第6様式			

泉 編 年		間 壁 編 年
第1様式	胴部上部に結節隆帯や爪形文列を2列めぐらす。【鷹島式・船元I式B類】	
第2様式	円形刺突文出現。【船元I式A類】	船元I式A類
a期	爪形文列をめぐらし上下に円形刺突文を施すものあり。	
b期	C字形爪形文がI字形籠描文に変化。円形刺突文多用、素隆帯も。	
第3様式	連弧文・三角形文多用。背の高い隆帯、特に刻目隆帯が特徴。	船元II式は頭部が僅かにくびれる。
a期	円形刺突文、爪形文やI字形籠描文はなし。	
b期	円形と三角形の組み合わせ文様。	
第4様式	半載竹管による平行沈線文を特徴とする。〔縄文地に平行沈線だけで連弧文を描く型式〕、〔三角形区画文の系統で隆帯と平行沈線により三角形を基本とする文様を描き、口縁部と胴部を隆帯によって区画するもの〕、〔三角形文と連弧文の組み合わせを平行沈線で表現したもの〕とがある。	船元III式は半載竹管を特徴とする。
第5様式	キャリバー形の口縁部で、頭部無文帯をもつ。地文は縄巻縄文ないし撚糸文であり、縄文はない。	
a期	口縁下に半載竹管による波状文でその下に連弧文のもの、口縁部に隆帯渦巻文A種を施すものがある。	船元IV式・縄文の条は交互に深淺
b期	口縁下の波状文は細密化したり交互刺突による波状文に変化し、隆帯渦巻文もB種に変わる。地文は撚糸文だけとなる。	撚糸文を地文とし、半載竹管の沈線紋：里木II式
第6様式	地文が条痕紋に変化した里木III式と口縁部に楕円形区画文を描く土器をまとめた。	里木III式（貝殻条痕地文）

※ 泉 拓良 1988 「船元・黒木式土器様式」『縄文土器大観』3 小学館



試掘調査



南から：試掘時



試掘



左は 65' トレンチ



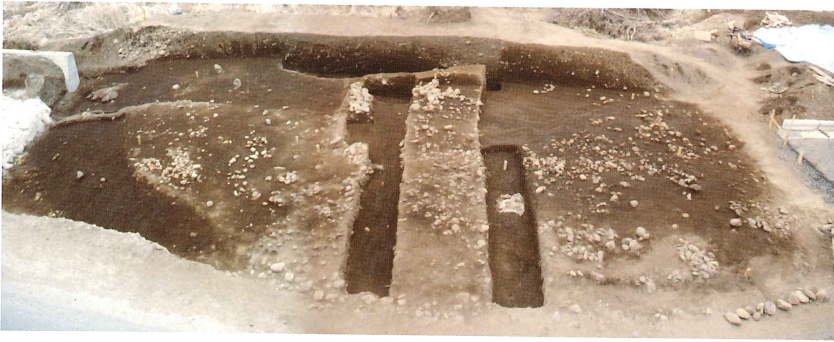
礫層除去段階



東側トレンチ



礫層除去段階の填丘状盛り



盛土を除去した縄文時代包含層上面



集石遺構



1号土坑



3号土坑



縄文住居と2号土坑



2号土坑



貝層出土状況(南から)



5号人骨



2号人骨



6号人骨



10号人骨



8a号人骨



7号人骨



7~9号人骨検出初期段階



5D 区アカホヤ火山灰上位のヤマトシジミ (轟式土器) 貝層



貝層採り上げ状況



調査指導 (手前から) 賀川光夫・後藤宗俊・清水宗昭・高橋



貝層を中心に剥取ったもの



断面剥ぎ取り風景





楕円押型文土器



山形押型文土器



46-6



47-1



48-5



48-10



48-13



48-14



59-3



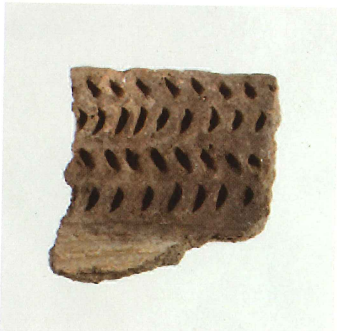
48-9



51-1



56-1



59-1



52-1



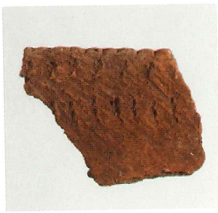
59-4



49-1



49-2



57-1



57-3



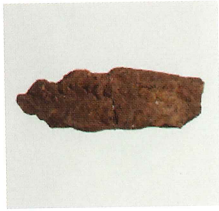
57-5



57-6



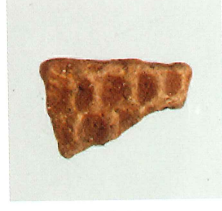
57-9



57-7



57-10



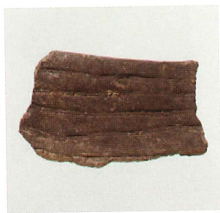
57-14



57-25



57-19



57-28



57-29



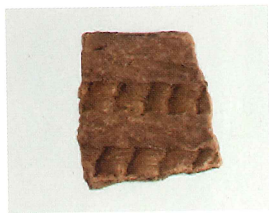
57-32



57-33



57-35



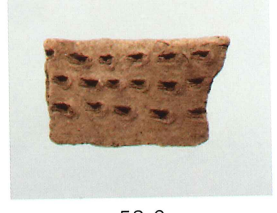
58-1



58-3



58-6



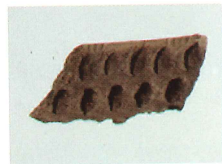
58-9



58-11



58-14



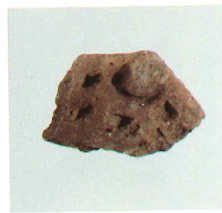
58-12



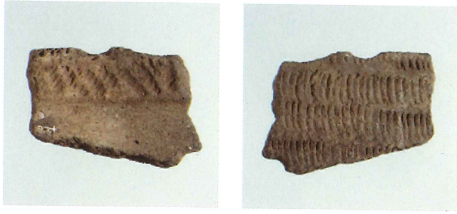
58-16



58-13



58-18



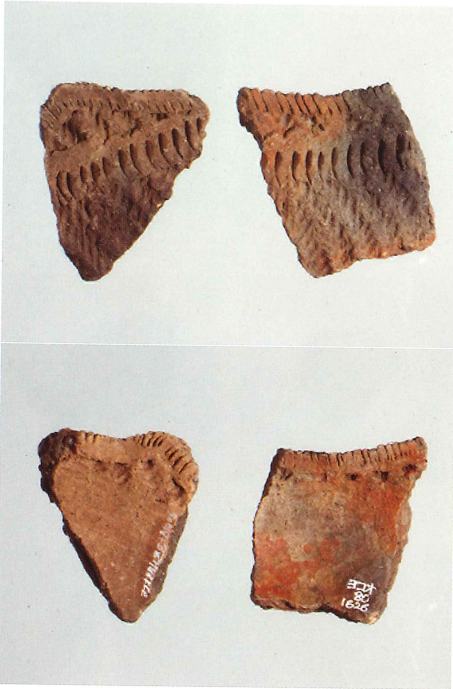
63-1



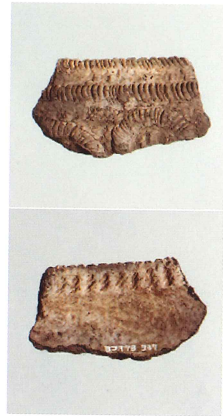
63-2



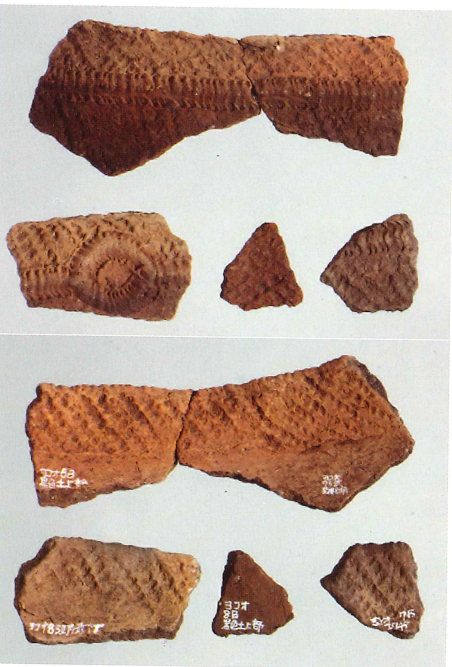
63-3



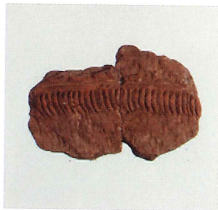
63-7



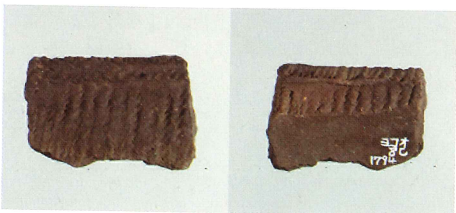
63-9



63-11



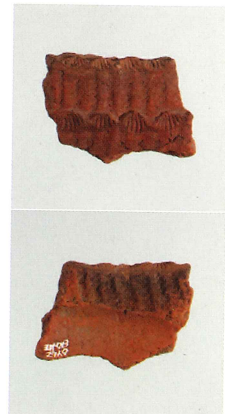
63-13



64-3



63-22



64-10



65-4



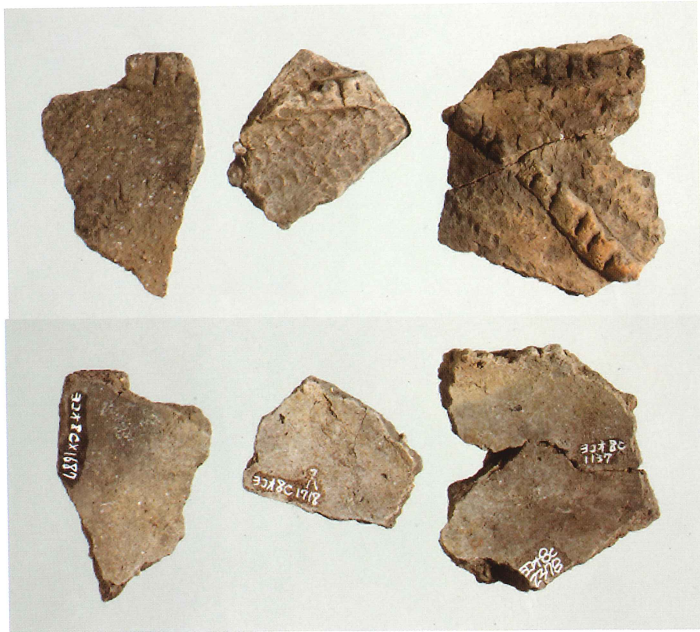
64-6



65-7



65-13



65-18



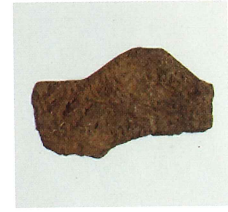
66-13



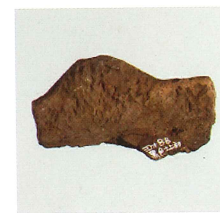
67-1



67-1



68-5



68-5



74-1



74-2



74-7



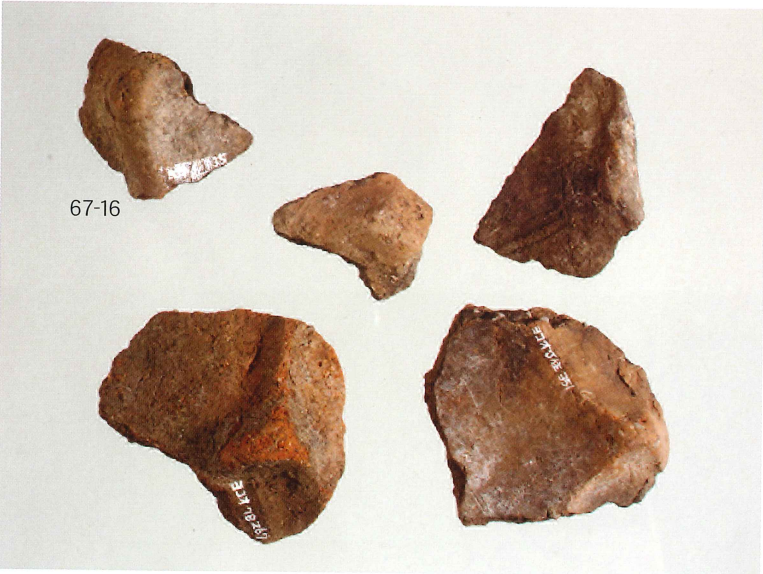
65-8



67-9



65-17



船元式土器の突起底部



93-3

93-5

93-21



93-23

94-3

94-10

94-21

94-25



94-26

95-4

95-8

95-15

95-20



95-27

96-8

97-3

97-5

97-19



100-1



109-22

109-24



80-5



81-10



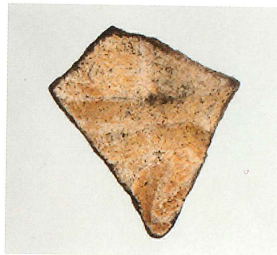
90-7



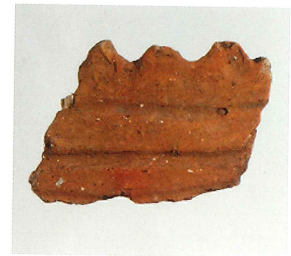
76-2



81-15



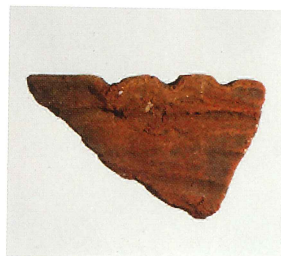
82-15



83-4



79-1



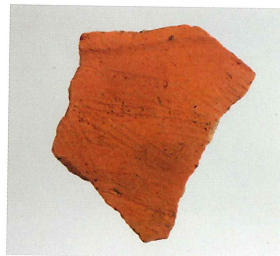
83-12



85-20



92-5



92-29



93-1



89-1



106-11



107-7



109-4



115-2



103-6



103-24



103-9



103-25



102



105-1



80-1



80-1



95-26



89-5



102-17



102-18



109-1



86-1



109-14



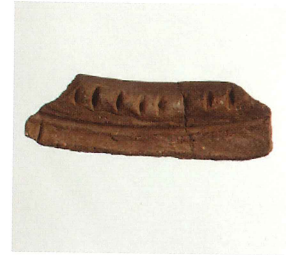
110-1



108-1



110-3



110-4



110-7



110-8



111



111-4



110-12



113-1



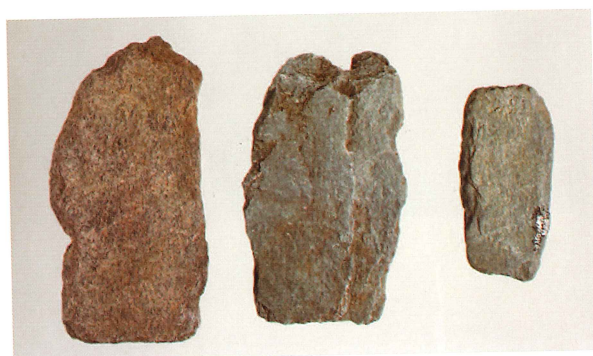
110-15



磨製石斧



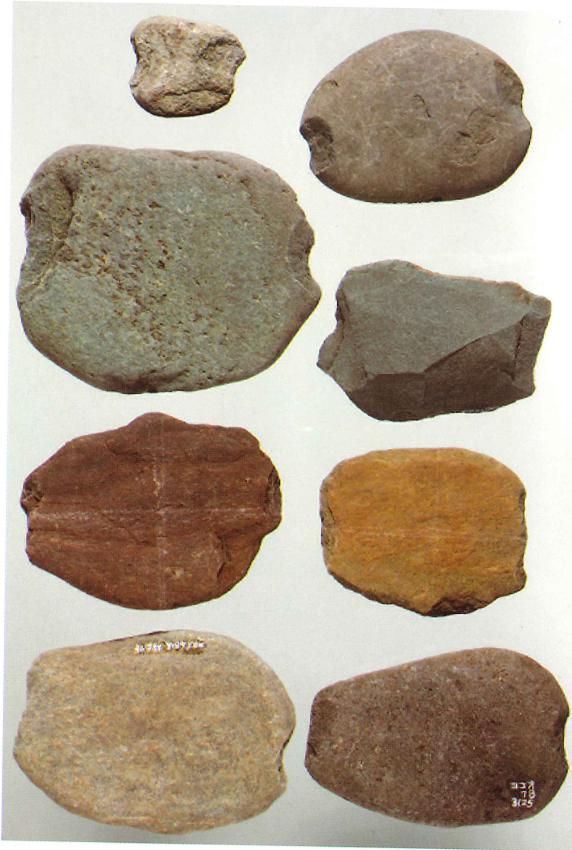
有溝石錘



結晶片岩製石器



石錘



石錘



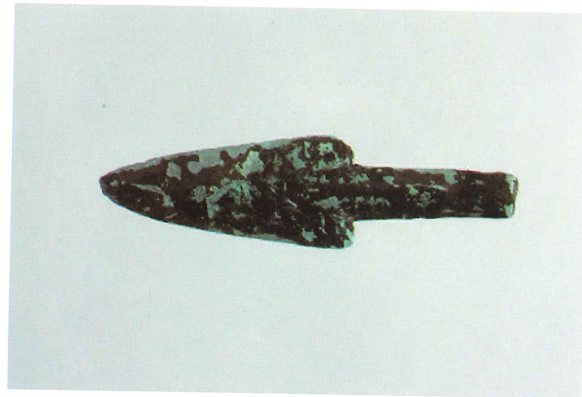
石錘



骨製品



鹿角製品



青銅製鍬



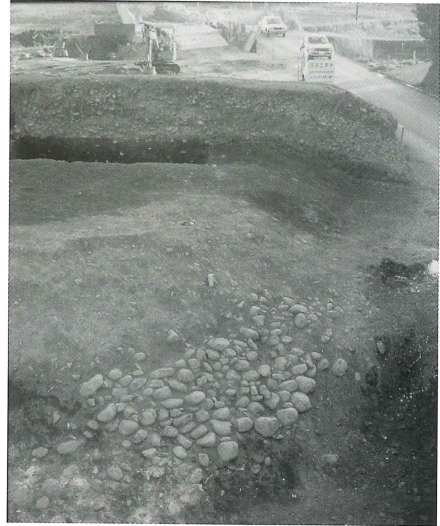
東方から見た横尾貝塚周辺の遠景



左は地表面の樹木伐採後の状態。右は礫層除去状況。



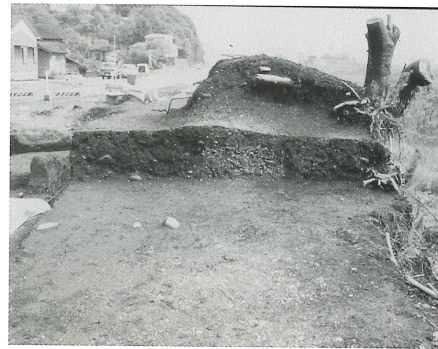
65年トレンチ跡（断面左部）



II層（礫層）下位の石積み遺構



II層（礫層）下位の石積み遺構



東部



東部水田との境界付近調査状況



北部トレンチ調査状況



東部



礫層除去後の面



礫層除去後の面



獸骨出土状況



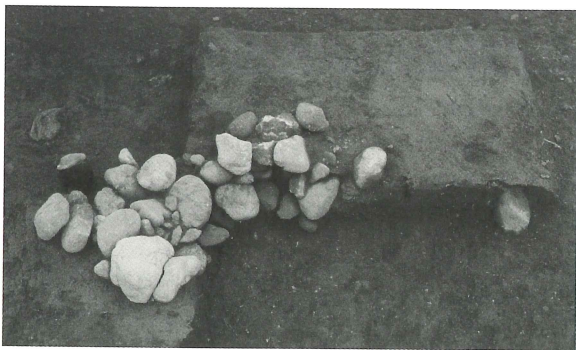
3号土坑 (手前)



遺状遺構



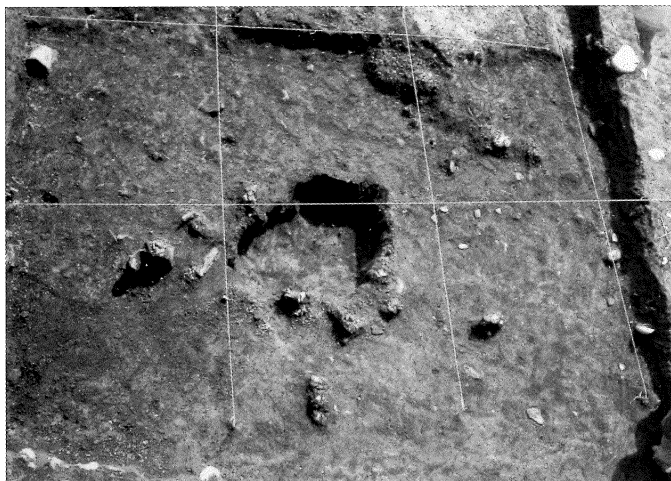
骨角器出土状態



3号集石



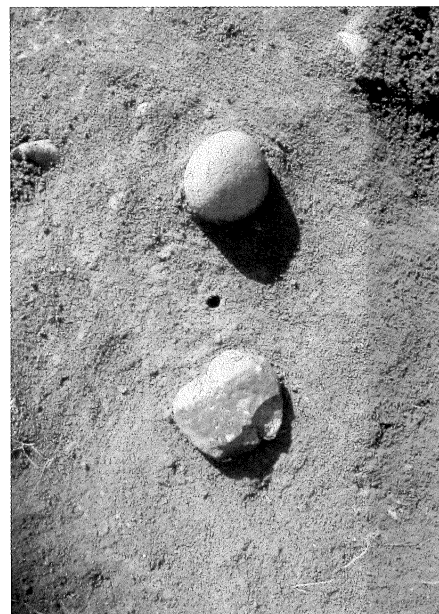
縄文後期住居跡



1号土坑



3号土坑



石錘出土状況



11号人骨



5号人骨



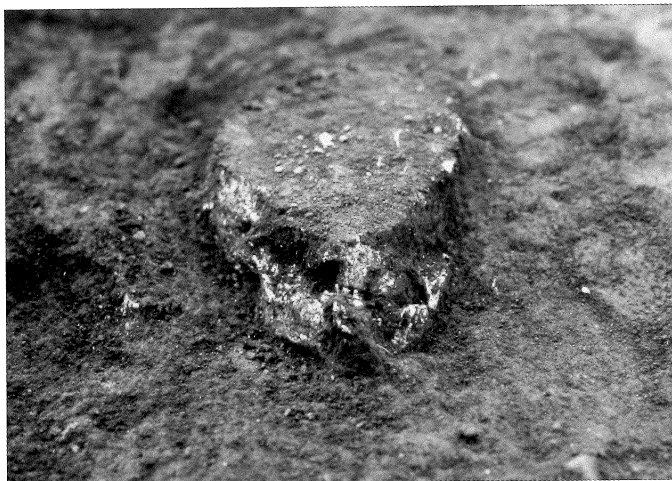
4号人骨



3号人骨



3号人骨



3号人骨



3号人骨

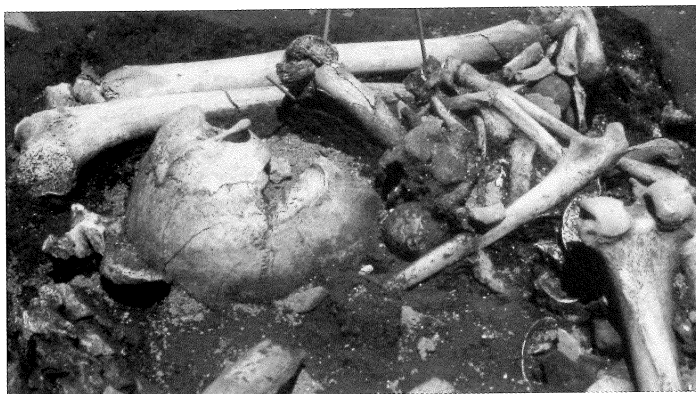


7~9号人骨接近写真1





7~9号人骨接近写真2





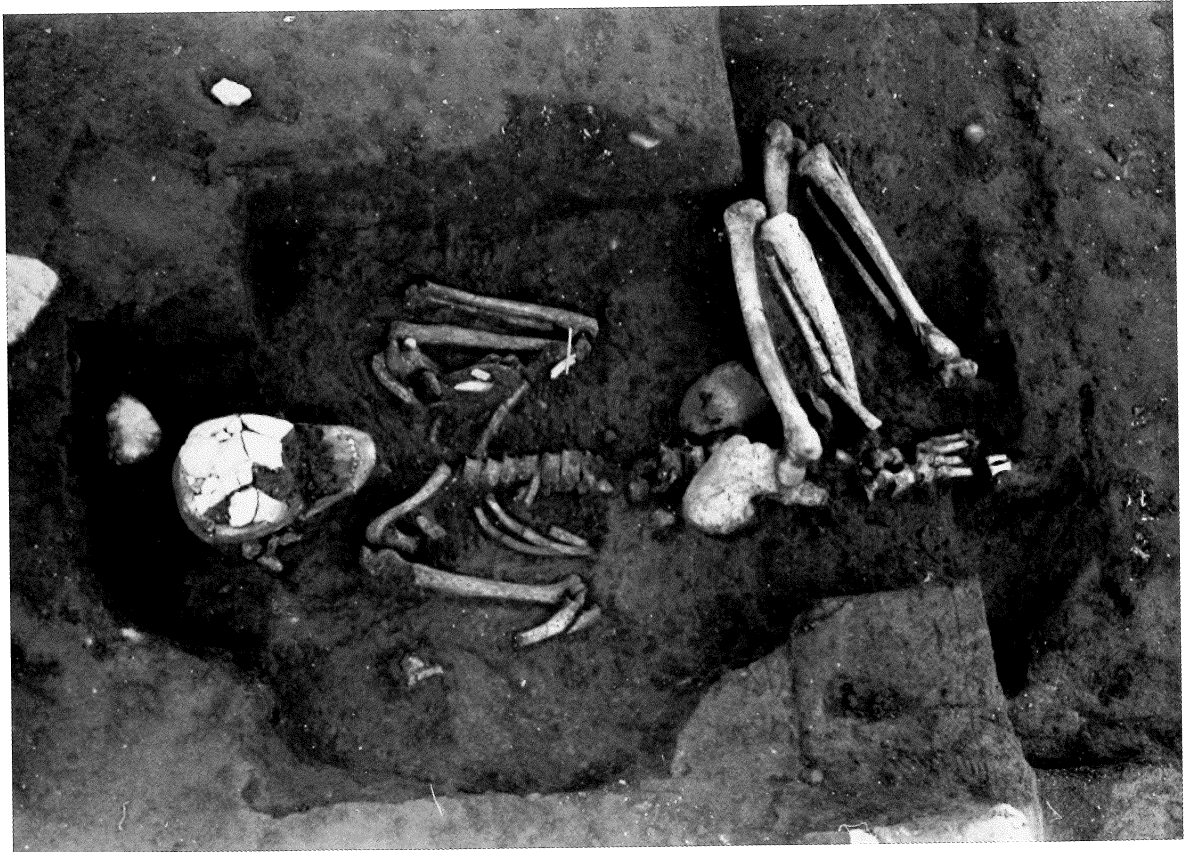
10号人骨検出状況



10号人骨と土層・貝層



7~9号人骨·2号土坑



6号人骨



剥ぎ取った断面



剥ぎ取りをした断面



貝層検出状況



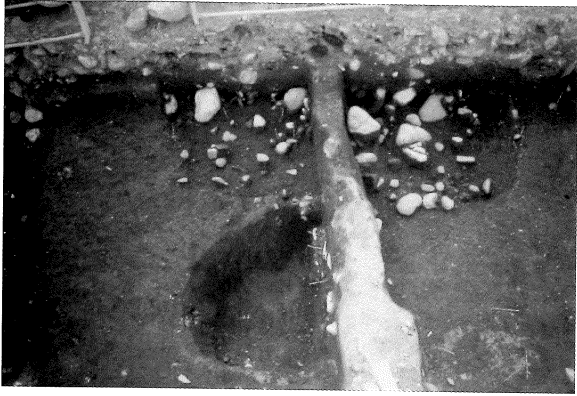
5D区前期のヤマトシジミ貝層



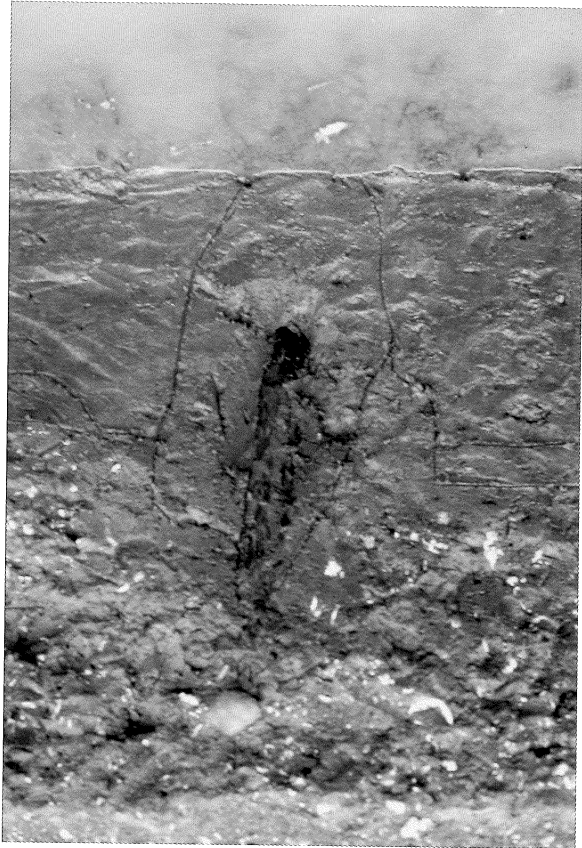
現地説明会の状況



発掘風景



縄文後期住居跡と2号土坑



水田杭拡大



東部トレンチと水田杭



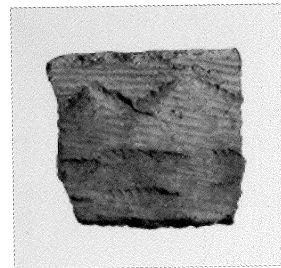
調査終末段階の道路と遺構面の関係



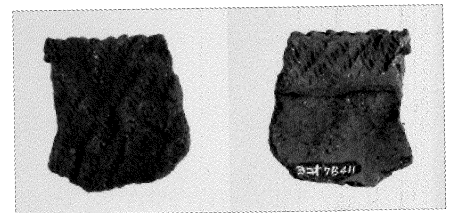
上4枚：65年トレンチと縄文遺構面



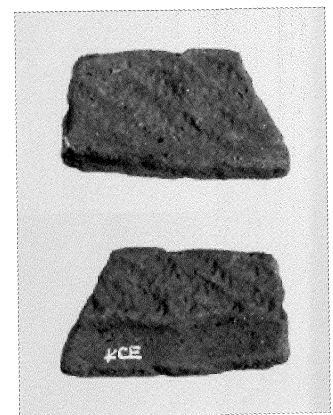
10号人骨周辺



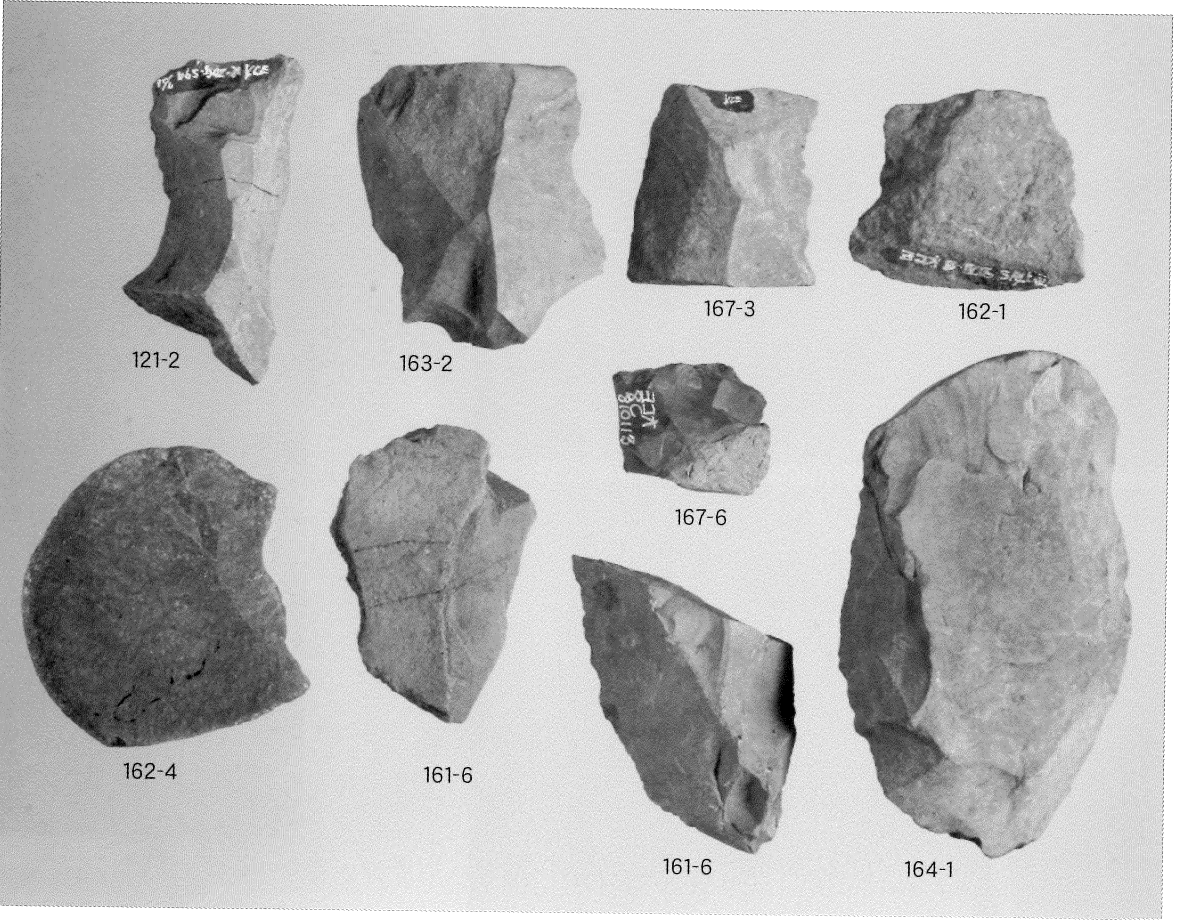
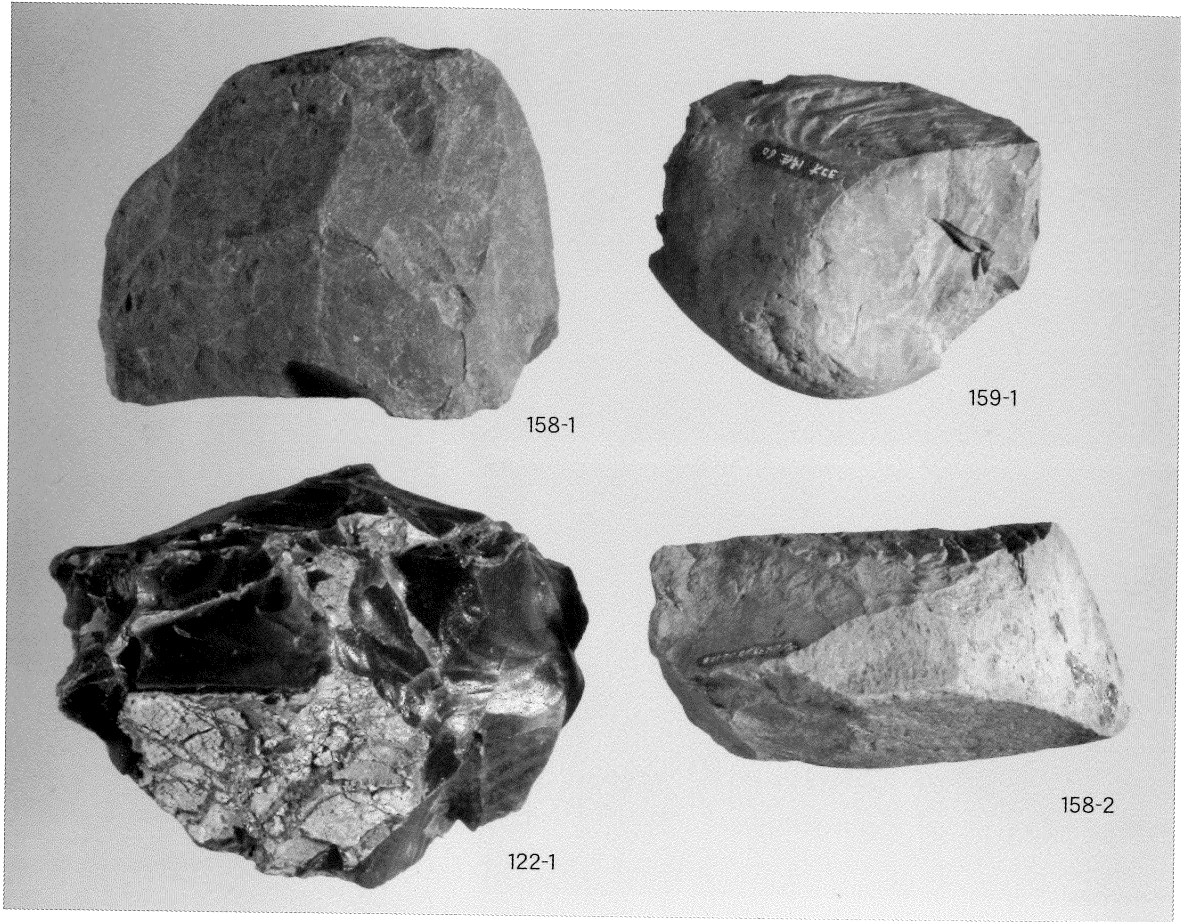
114-30



70-2



71-3



報 告 書 抄 録

ふりがな	よこおかいづかはつくつちょうさほうこくしよ
書 名	横尾貝塚発掘調査報告書
	県道鶴崎大南線道路改良工事に伴う発掘調査報告書
副 書 名	
巻 次	
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 58 集
編著者名	高橋信武・西本豊弘・小池裕子
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所 在 地	〒 870-1113 大分市大字中判田 1977
発行年月日	2012 年 3 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
横尾貝塚	大分市大字 横尾字江又	44201	322163	33° 12' 01"	131° 40' 47"	19801110 ～ 19810625	約 260 m ²	県道改良

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横尾貝塚	貝 塚	縄文時代	竪穴住居跡 貝層・埋葬 17 体・土坑	押型文土器・轟式・曾畑式・ 列点文土器・大歳山式・鷹島 式・船元式・阿高式・西和田 式・中津式・小池原上層式・ コウゴ-松式・福田 K II 式・ 魚骨製装飾品	
		古墳時代 弥生～古代?	竪穴住居跡	鹿角製楽器?	

要 約	昭和 55・56 年度に行った発掘調査の報告書。縄文時代前期（轟式）と中期（船元式）の貝層があり、その上に後期の遺物包含層が堆積していた。埋葬人骨は一次埋葬状態のものと集骨した二次埋葬状態のものがある。
-----	---

横尾貝塚

県道鶴崎大南線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24(2012)年3月30日発行

編集・発行者 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中判田1977番地
TEL097-597-5675

印刷所 良栄堂印刷
